ISSN0918-1946

調 査 年 報 16

平 成 15 年 度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

調 査 年 報 16

平 成 15 年 度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

恵庭市　西島松５遺跡　縄文時代後期後葉～晩期前葉の土壙墓調査状況

恵庭市　柏木川13遺跡　縄文時代早期の竪穴住居跡

上磯町　館野遺跡　縄文時代中期末葉の竪穴住居跡

森町　石倉 2 遺跡　縄文時代中期後半の竪穴住居跡群

目　　次

平成15年度の調査
1　調査の概要 ……1
2　調査遺跡 ……4
オルイカ１遺跡 ……4
チプニー２遺跡 ……6
キウス５遺跡……10
対雁２遺跡……14
館野遺跡……18
大岩５遺跡……22
米原４遺跡……24
宮戸４遺跡……27
ポンアヨロ４遺跡……30
穂香竪穴群……32
旧白滝５遺跡……37
旧白滝８遺跡……38
中島遺跡……38
白滝遺跡群の整理……45
北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）関係の遺跡……46
三次郎川左岸遺跡……48
三次郎川右岸遺跡……50
石倉５遺跡……54
石倉３遺跡……56
石倉２遺跡……58
石倉１遺跡……62
本茅部１遺跡……64
上台２遺跡……66
上台１遺跡……72
森川４遺跡……76
森川３遺跡……79
西島松３遺跡……80
西島松５遺跡……80
柏木川13遺跡……84
3　現地研修会の記録……88
4　協力活動及び研修……90
5　平成15年度資料の貸し出し……93
6　平成15年度刊行予定報告書……94
7　組織・機構……95
8　職員……96

北海道史略年表

本州の時代区分	年代（西暦）	北海道の時代区分	平成15年度調査遺跡の主な時期
明治～平成	A.D.1900	（近代、現代）	
江戸時代	A.D.1600	近世 / 中世 アイヌ文化期	キウス５ 森川３、上台２ チプニー２
室町時代			
鎌倉時代	A.D.1200		
平安時代	A.D.800	擦文時代	チプニー２、キウス５ 西島松５、旧白滝８
奈良時代		オホーツク文化期	柏木川13
古墳時代	A.D.400	続縄文時代	石倉１
弥生時代	B.C.300		旧白滝８、三次郎川右岸
縄文時代 晩期	B.C.1000	縄文時代 晩期	対雁２、オルイカ１、キウス５、中島 西島松５
縄文時代 後期	B.C.2000	縄文時代 後期	西島松５ 三次郎川右岸 館野、上台１、森川４、石倉３、オルイカ１
縄文時代 中期	B.C.3000	縄文時代 中期	石倉１、石倉２、キウス５、チプニー２ 上台１、森川４、米原４、穂香竪穴群、 本茅部１、三次郎川右岸
縄文時代 前期	B.C.4000	縄文時代 前期	大岩５、森川４ 宮戸４、西島松５
縄文時代 早期	B.C.7000	縄文時代 早期	宮戸４、ポンアヨロ４ 穂香竪穴群 柏木川13
縄文時代 草創期	B.C.10000	縄文時代 草創期	旧白滝５？
旧石器時代	B.C.12000	旧石器時代	旧白滝５
旧石器時代	B.C.20000	旧石器時代	旧白滝５
	B.C.30000		

平成15年度の調査

1　調査の概要

今年度は道内11市町村に所在する27遺跡で発掘調査を実施した。このうち10遺跡は昨年度に続く調査である。前年度から継続で整理作業を行ったのは4市町村の5遺跡である。

発掘調査を工事原因別に見ると、国土交通省北海道開発建設局の各建設部が実施する河川改修、あるいは国道の建設や改良に伴う調査が13遺跡、日本道路公団の高速道路建設に関わるものが11遺跡、土木現業所が行う河川改修に関連するものが3遺跡である。

以下、調査の成果を時代、時期順に略述する。縄文時代の遺跡では複数の時期の遺物が出土することが多いが、ここでは顕著なものを重点的に述べる。なお、遺構などの（　）数字は員数である。

旧石器時代　旧白滝5遺跡では、前半期の石器群（台形様石器群）、後半期の石器群（細石刃石器群）が出土しており、縄文時代草創期かと予測される小型で精細な加工の尖頭器も認められる。

縄文時代　早期　柏木川13遺跡で検出された住居跡はアルトリ式土器の時期のもので、床面から土器、石斧などが出土している。穂香竪穴群では黒曜石製の両面調整石器、石槍など40点がまとまって検出された。この石器集中は、周辺の焼土、石鏃、石刃鏃などとともに東釧路Ⅱ式土器の時期のものである。宮戸4遺跡、米原4遺跡で出土している土器は、東釧路Ⅲ式、コッタロ式などである。西島松5遺跡では竪穴住居跡（2）が検出されている。ポンアヨロ4遺跡では、駒ヶ岳g火山灰層（別名幌別火山灰）よりも下位から、中茶路式土器の残存状態の良好なものが出土している。

前期　宮戸4遺跡では前半（綱文式土器）の土器・石器等が多く出土している。西島松5遺跡には、縄文尖底土器（静内中野式）の時期とみなされる竪穴住居跡（15）がある。

大岩5遺跡では、円筒下層式土器が検出されている。

中期　三次郎川右岸遺跡の狭い平坦部分で検出された竪穴住居跡（12）、配石遺構（1）、土坑（60）の多くは中期後半～後期前半の時期のものである。ここの竪穴住居跡は、ベンチ構造が認められるもの、壁際に溝があるもの、掘り込みが浅いもの、埋甕が残るものなど、それぞれに特色がある。土坑にはフラスコ状のものもある。また、配石遺構の下には土坑があった。

上台1遺跡の沢に面した斜面部では、竪穴住居跡（1）、土坑（59）、立石（7）、配石遺構（3）、石囲い炉（14）などが検出されている。これらの遺構は、中期中葉～後期前葉の時期のものである。

森川4遺跡の土坑（8）にはフラスコ状のものもある。本茅部1遺跡ではサイベ沢Ⅶ式土器1個体が見つかっている。西島松5遺跡では、竪穴住居跡（9）が検出されている。

チプニー2遺跡で検出された竪穴住居跡（5）、土坑（6）は後半の頃のものである。キウス5遺跡では後半の時期の竪穴住居跡（12）を調査した。竪穴住居は、次年度以降の調査予定区域に広がっていると推定されている。米原4遺跡では後半の時期の遺物が出土している。

穂香竪穴群では、モコト式土器の時期の竪穴住居跡（4）、土坑（3）、焼土（8）等が検出されている。石倉2遺跡では竪穴住居跡（12）、土坑（9）があり、ほとんどの住居跡から、床面に埋設土器（榎林式土器）が検出されている。また、大半の住居跡に焼け落ちたような痕跡が認められた。IH－3と呼んでいる住居跡の壁際から、120点ほどの凝灰質の砂岩片が出土した。これらの破片を接合した結果、直径9cm、長さ50cm、重さ3.6kgほどの整った形態の円柱に復元されている。石倉1遺跡では、中期後葉から後期前葉にわたる時期の遺物が多く出土している。

館野遺跡では、中期後葉から後期前葉にわたる時期の遺構、遺物が多く検出されている。竪穴住居跡（40）、土坑（49）、石囲い炉（10）、焼土（56）、石組み（13）などの遺構、30万点を上まわる土器・石

器等である。竪穴住居跡は、平面形が略卵形で、先端ピットと石囲い炉、垂直に立つ4本あるいは6本の柱穴、壁際の周溝などを特色とするものが多い。フラスコ状ピットは、列状配置をなしている。

後期　宮戸4遺跡では多くのTピット（33）が検出されており、米原4遺跡のものも合わせ考えると、イモッペ川の両岸に延々と続く遺構群の一部とみなされる。石倉3遺跡で検出された配石を伴う土坑（1）は、余市式土器の時期のものであろう。この遺跡では調査範囲のほぼ全面につぶて様の礫が見られた。森川4遺跡にはトリサキ式土器が残されている石組み炉がある。

西島松5遺跡では竪穴住居跡（8）と土壙墓が多く見つかっている。確認された土壙墓（約150）のうち後期末～晩期前葉の時期の37を調査した。これらの墓の副葬品には、土器、石器、漆製品（櫛、腕輪、玉ほか）、玉類（かんらん岩製、琥珀製など）、サメの歯などがある。

晩期　キウス5遺跡では台地の縁に土坑（12）が検出され、低地部の旧河川部から木製遺物「キウス型横槌」が出土している。石倉2遺跡では土器集中が3ヵ所あり、すべて後半の時期である。

後半以降の遺跡である対雁2遺跡からは土坑（13）、焼土（17）、集石（5）等が検出されている。ここでは精緻な発掘により、焼土の周囲に土器を据えるためと考えられる浅い皿状の窪みを検出できたところもある。中島遺跡からは、後葉の土器とみなされるものが少量出土している。

続縄文時代　三次郎川右岸遺跡で検出された焼土（15）の大部分は、その検出層位から判断すると、この時期のものである。前年度の調査で後北C_1式と見なされる土器が少量出土した旧白滝8遺跡には焼土（1）、剥片集中（6）がある。柏木川13遺跡の土壙墓には、墓底に完形の鉢が認められた。

平成15年度の発掘調査など

事業委託者	原因工事	遺跡名	所在地	調査面積（m²）	区分、備考
札幌開発建設部	一般国道337号千歳市新千歳空港関連工事	オルイカ1遺跡	千歳市	1,600	平成14年から継続
		チプニー2遺跡	千歳市	2,000	平成13年にも調査
		キウス5遺跡	千歳市	5,000	新規
石狩川開発建設部	石狩川改修工事の内対雁築堤工事	対雁2遺跡	江別市	2,200	平成11年から継続
		対雁2遺跡	江別市	整理作業	
函館開発建設部	函館江差自動車道建設工事	館野遺跡	上磯町	5,750	新規
	一般国道278号鹿部道路工事	大岩5遺跡	鹿部町	1,800	新規
室蘭開発建設部	日高自動車道厚真門別道路工事	菅戸4遺跡	鵡川町	5,950	平成12年から継続
		米原4遺跡	鵡川町	1,090	平成12年から継続
	一般国道36号登別市登別拡幅工事	ポンアヨロ4	白老町	284	新規
釧路開発建設部	一般国道44号根室市根室道路工事	椿香駅穴群	根室市	3,440	平成13年から継続
網走開発建設部	一般国道450号白滝丸瀬布工事	旧白滝5遺跡	白滝村	7,340	新規
		旧白滝8遺跡	白滝村	1,160	平成14年から継続
		中島遺跡	丸瀬布町	1,900	新規
		白滝遺跡群	白滝村	整理作業	
日本道路公団札幌支社	北海道縦貫自動車道建設工事	三次郎川左岸遺跡	森町	1,420	新規
		三次郎川右岸遺跡	森町	2,600	新規
		石倉5遺跡	森町	962	新規
		石倉3遺跡	森町	3,670	新規
		石倉2遺跡	森町	2,324	新規
		石倉1遺跡	森町	1,900	平成14年から継続
		本茅部1遺跡	森町	498	平成14年から継続
		上台2遺跡	森町	5,026	新規
		上台1遺跡	森町	6,200	新規
		森川4遺跡	森町	1,400	新規
		森川3遺跡	森町	60	平成14年から継続
		園川左岸遺跡	森町	整理作業	平成13・14年発掘
		倉知川右岸遺跡	森町	整理作業	平成14年発掘
札幌土木現業所	柏木川改修工事	西島松3遺跡	恵庭市	4,120	新規
		西島松5遺跡	恵庭市	980	平成12年から継続
		柏木川13遺跡	恵庭市	1,463	新規
		西島松5遺跡	恵庭市	整理作業	
			合　計	71,137	

擦文時代　西島松５遺跡では、竪穴住居跡（5）が検出されており、前年度の調査で明らかになった住居群と集落をなすものである。柏木川13遺跡では住居跡（4）が検出されているが、そのうちの２軒は、柱穴の位置から判断して「カリンバ型」と呼ばれるものである。

チプニー２遺跡では伸展葬とみなされる墓（1）が検出された。この墓壙東端部の覆土から擦文土器（3）と鏃先（2）、刀子（2）などの鉄製品がまとまって出土した。キウス５遺跡では溝状遺構が２本見つかっている。

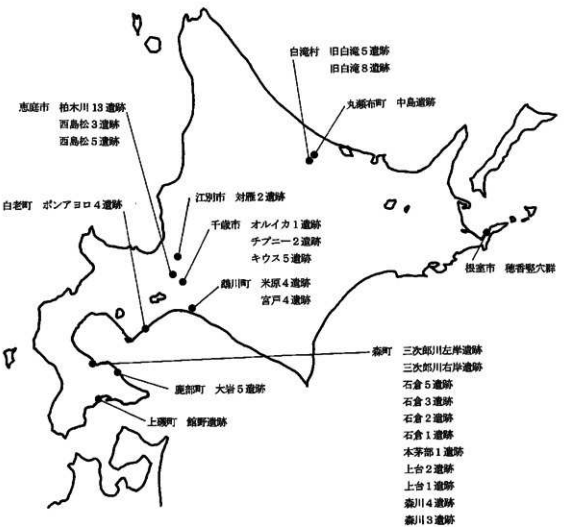
旧白滝８遺跡では、ごく少量ではあるが擦文土器が出土している。

アイヌ文化期　チプニー２遺跡では平地式住居跡（3）、「送り場」遺構（1）、焼土（17）、灰集中（1）などが検出されている。ここでは青磁碗、鉄鍋、鉄斧も出土している。キウス５遺跡では３面の畑跡が検出されたが、いずれも樽前ａ降下軽石層（Ta－a）よりも下位のものである。ここの低地部からは炉鉤、竪杵、曲物、桶側板などの木製品が出土している。

館野遺跡で、16世紀前後のものと推定される畑跡が確認されている。上台２遺跡では、駒ケ岳火山灰ｄ層よりも下層から畑跡が検出され、10世紀～16世紀の時期を推定している。

継続整理・報告書作成

対雁２遺跡、西島松５遺跡、白滝遺跡群については、それぞれ膨大な資料群の整理が継続されている。



2　調査遺跡

オルイカ１遺跡（Ａ－03－88）

事 業 名：一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：国土交通省北海道開発局札幌開発建設部
所 在 地：千歳市中央2529－３、27、28
調査面積：1,600m²
発掘期間：平成15年５月６日～７月11日
調 査 員：菊池慈人、末光正卓

遺跡の概要

遺跡は、千歳市街の北東約5.5km、中央地区に位置する。馬追丘陵の西側の麓で、千歳川水系の河川により形成された上位～下位段丘面上に立地する。遺跡は、本来的には一連の段丘上に広がっていたものと推測されるが、すでに河川改修された現オルイカ川により分けられている。左岸側の5,460m²については、平成14年度に調査・報告が完了している。本年度は右岸側の1,600m²を調査した。これで、本事業関連のオルイカ１遺跡の発掘調査はすべて完了となる。本年度の調査区の地形は、南側が比較的平坦な段丘で、そこからは北側に向かって傾斜している。特に、北西と北東の両側部分には低地部が認められる。これら低地部は、現地表面から約1.5～２m掘り下げると湧水する。これらのうち北西側の低地部は、昨年度の調査区にみられたような、比較的ゆるやかな傾斜であり、一方、北東側の低地部はやや急に落ち込む状況が認められ、オルイカ川の旧河道である可能性がある。また、南側の段丘部は、土層が削平され、さらに昨年度まで宅地として利用されていたため、大規模な攪乱部分が多数存在した。

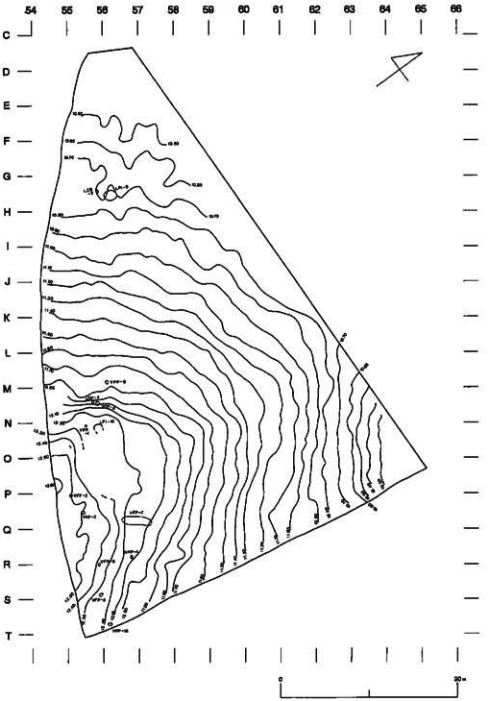
遺構と遺物

遺構はすべて、樽前Ｃ降下軽石層（Ⅳ層）下位の黒色土層（Ⅴ層）で確認され、Ⅳ層上位の黒色土層（Ⅲ層）や、Ⅴ層下位の漸移層（Ⅵ層）では確認されなかった。遺構が分布する地点は、南側の段丘部と、北西側の低地部の２ヵ所である。前者には、土器破片集中（LCP－4）や、土坑（LPI－10）、焼土（ⅤFP－1～10）がある。特に、焼土はすべて段丘部でのみ検出された。後者は、土坑（LPI－9）と礫集中（LCS－2）が存在する。LPI－9の覆土からは、礫石器や自然礫がまとまって出土した。遺構はすべて縄文時代に属すると推測される。

遺物も遺構とほぼ同様で、Ⅴ層からの出土点数が圧倒的に多い。大まかには、ほぼ調査区全体から出土が認められるが、南側の段丘部に最も多く、両低地部には少ない。土器は1,913点出土した。縄文時

遺跡位置図
（この図は国土地理院発行の５万分の１地形図「恵庭」「千歳」を使用したものである）

代後期初頭のタブコブ式が最も多く、LCP－4からは胴部中位から底部までの破片がまとまって出土した。ついで多いのは晩期後半の土器で、包含層から出土した浅鉢の破片が復原された。また、後期中葉のものも極少量出土している。石器類は439点出土した。剥片石器としては、石鏃、石槍・ナイフ、つまみ付きナイフ、スクレイパー等が出土している。多くが黒曜石製であるが、つまみ付きナイフは頁岩製が多い。磨製石器としては磨製石斧があり、礫石器では、すり石、たたき石、砥石、台石がある。砥石、台石が比較的多いことが特徴としてあげられる。さらに、接合された大型の砥石もある。また、石錘と推測されるものも数点認められる。



遺構位置図

チプニー２遺跡（Ａ－03－278）

事 業 名：一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：国土交通省北海道開発局札幌開発建設部

所 在 地：千歳市中央1026－13

調査面積：2,000m²

発掘期間：平成15年５月６日～７月11日

調 査 員：皆川洋一、広田良成

遺跡の概要

チプニー２遺跡は、馬追（まおい）丘陵西側緩斜面に流れるチプニー川右岸の河岸段丘に立地する。本河川流域に関しては平成13年度に左岸のチプニー１遺跡（4,360m²）と右岸のチプニー２遺跡（450m²）が既に調査されており、本年度の調査はそれに続くチプニー２遺跡の二次調査となる。調査区の地形は川に接した低位（標高約16m）と高位（標高約20m）の段丘面で構成されており、遺構・遺物の大多数は遺跡の大半を占める後者の平坦面から得られている。

包含層は、上位のⅢ層（「第Ⅰ黒色土層」相当：縄文時代晩期～アイヌ文化期）と下位のⅤ層（「第Ⅱ黒色土層」相当：縄文時代早期～晩期）の２層である。この間には樽前ｃ降下軽石（Ta－c：BC2300頃降下）（Ⅳ層）が位置していおり、またⅢ層中からは量的に少ないものの白頭山－苫小牧火山灰（B－Tm：10世紀頃降下）も検出されている。

遺構と遺物

遺構は、Ⅲ層から「送り場」遺構１ヵ所と平地式住居３軒（UH－1～3）、墓１基（UP－1、焼土35ヵ所（UF－1～17）、灰集中１ヵ所（UA－1）、などが見つかっている。大半はアイヌ文化期のものと考えられるが、墓については副葬された土器などから擦文文化期と判断される。Ⅴ層からは竪穴式住居５軒（LH－1～5）、土壙６基（LP－1～6）、Ｔピット２基（TP－1・2）、焼土58ヵ所（LF－1～58）、が見つかっている。

遺物は、Ⅲ層から縄文時代晩期末のタンネトウＬ式土器、擦文土器、坏、青磁碗など、編物に使われたと考えられる礫錘具などの石器、鉄鍋、刀子などの鉄製品が出土している。Ⅴ層から縄文時代早期後葉、中期後半、後期、晩期などの土器が出土しており、主体は中期後半の煉瓦台式、北筒式などである。石器は石鏃、石鋲、つまみ付ナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石、砥石があり、玉などの石製品も出土している。

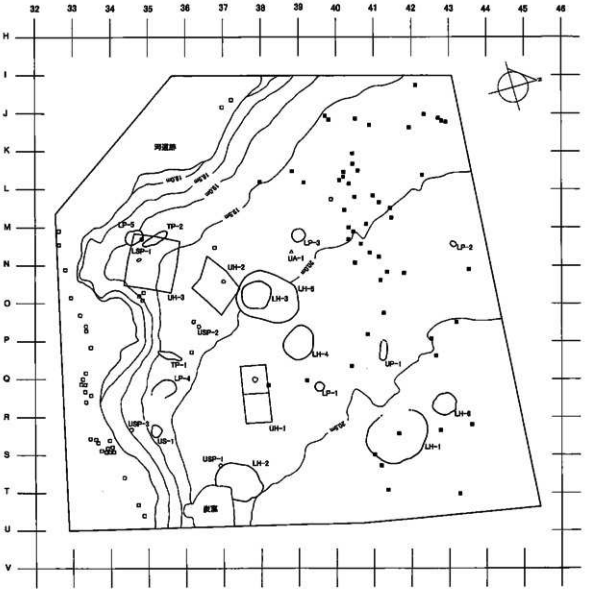
今回の調査では、Ⅲ層から擦文文化期とアイヌ文化期の残存良好な遺構・遺物が得られている。

墓（UP－1）は、壙内から人骨は見つかっていないが、形態や規模から伸展葬である可能性が高い。副葬品は擦文土器（甕×２、坏×１）と鉄製品（鉄先×２、刀子×２、鞘尻金具×１、針×１、紡錘車の可能性を持つ円盤×１他）などで、全て埋め戻された覆土の上に置かれていた。この中で特に鉄製品は数的にも豊富で、その構成は鉄先などに代表されるように農耕あるいは日常的な生活色の濃いのが大きな特徴となっている。遺体の頭位は明らかではないが、副葬品の大半が墓穴平面形の東側からまとまって出土していることから東位であった可能性がある。時期は副葬品と覆土内の火山ガラスからB－Tm降下以降の10世紀、下っても11世紀頃と考えられる。この時期埋葬方法が「屈葬」から「伸展葬」へと変化するのだが、UP－1はその間を埋める資料である点で非常に重要である。平地式住居３軒（UH－1～3）はアイヌ文化期のもので、注目されるのは、青磁碗の検出されたUH－1と鉄鍋を使った「送り」儀礼が行われたと考えられるUH－3である。UH－1の青磁碗（１点）は、炉跡周辺から鉄斧や編物に使う礫錘具等と共に見つかっている。淡い青緑色で文様は側面に太い線で蓮弁文がめぐらされ貫

入はみられない。時期は14世紀後半～15世紀前半頃と考えられる。「送り」儀礼の行われた鉄鍋は内耳と一文字湯口を備える小形のもので、UH－3の位置する段丘縁辺からチプニー川に面した低位段丘面にかけて破片がばらまかれた状態で出土している。

また、Ⅴ層で見つかった竪穴式住居はすべて縄文時代中期後半頃のもので集落の一部を成している可能性が高い。

チプニー２遺跡は調査区外にも広がり、その一部は道路建設用地になっており、今後調査が行われる予定である。



Ⅲ層の遺構「U」(Upper)、Ⅴ層の遺構「L」(Lower)

H ：住居跡　SP：柱穴状ピット
P ：土壙　A ：灰集中
TP：Tピット　S ：礫集中

○：Ⅲ層検出の柱穴状ピット
□：Ⅲ層検出の焼土
△：Ⅲ層検出の灰集中
●：Ⅴ層検出の柱穴状ピット
■：Ⅴ層検出の焼土

0　10　20m

遺構位置図

調査風景

UP－1検出状況

UP－1遺物出土状況

UP－1完掘

UH－1遺物出土状況

UH－1青磁出土状況

UH－1鉄斧出土状況

LH－2遺物出土状況

LH－6遺物出土状況

キウス５遺跡（Ａ－03－93）

事 業 名：一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：国土交通省北海道開発局札幌開発建設部

所 在 地：千歳市中央1286、1287、1319

調査面積：5,000m²

発掘期間：平成15年５月６日～10月31日

調 査 員：三浦正人、皆川洋一、菊池慈人、末光正卓、広田良成

遺跡の概要

千歳市街から北東へ約８km、馬追丘陵西麓の中央地区にある（オルイカ１遺跡図参照）。包蔵地範囲は現国道337号線から丘陵部にかけて東に約１km、幅約200mで、旧馬追沼に注ぐキウス川の右岸の段丘上から台地縁辺、低位部にかけて広がる。標高は約６～40mである。平成６～10年度に高速道路建設に伴う発掘調査を当センターと千歳市教育委員会が行っており、55,885m²が既調査である。

調査は国道337号線の新ルート建設工事に伴うもので、丘陵端部に近い台地部とキウス川沿いの低位部が対象である。今年度はこのうち台地部約~~1,000~~800m²・低位部約~~4,000~~4,200m²の計5,000m²を調査した。

台地部の基本層序は、Ⅰ層：表土、Ⅱ層：樽前ａ降下軽石層（Ta－a）、Ⅲ層：第１黒色土層、Ⅳ層：樽前ｃ降下軽石層（Ta－c）、Ⅴ層：第２黒色土層、Ⅵ層：漸移層、Ⅶ層：恵庭ａ降下軽石の風化ローム層（En－L）、Ⅷ層：恵庭ａ降下軽石層（En－P）、Ⅸ層：支笏軽石流堆積物（Spfl）である。低位部でのⅤ～Ⅶ層は河川堆積物を主とした砂礫・シルト・粘土の互層で、間層に数枚の黒色土層が入る。さらにこれを大きな流路（旧河川）や小規模の流水痕が幾重にも浸食し、そこに砂礫とシルト質粘土が堆積している。台地部ではⅤ層、低位部ではⅢ層と旧河川部の砂礫層が、主な遺物包含層である。

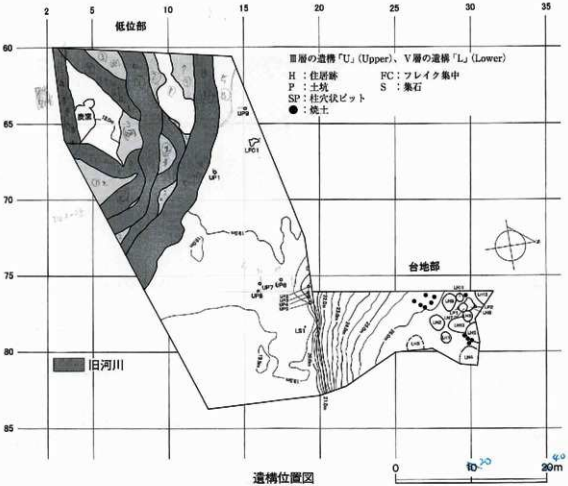
遺構と遺物

台地部：平成８年度の調査区と隣接する北側の平坦部で、縄文時代中期後半の竪穴住居跡12軒を確認した。１軒は次年度以降の調査区にかかるため未調査である。調査した11軒は平面形が円～楕円形で大小があり、小さなものは径約2.1mである。一部に竪穴どうしの切り合いもみられる。他に、土坑２基、焼土12ヵ所を調査した。これら遺構の広がりは、次年度以降の調査区に続いている。

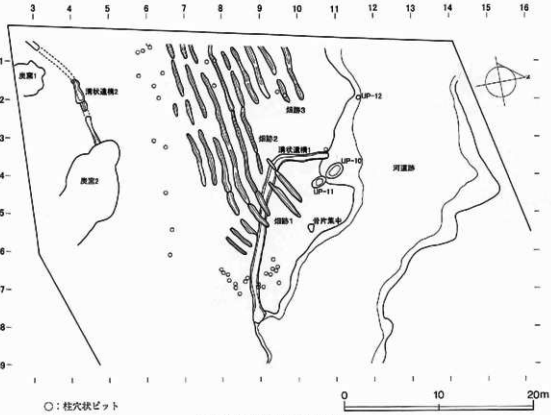
遺物の総点数は約7,000点で、遺構の集中する平坦部に多く、斜面に向かって減少する傾向にある。土器は竪穴出土を主として大半が縄文中期後半に属する。石器は遺構で石斧・台石が多く、包含層でも石斧は多い。ほかに石鏃・スクレイパー・砥石などの出土が顕著である。

低位部：遺構は調査区西側のⅢ層表面で確認した畑跡３面と溝状遺構２本がある。畑跡はTa－a層と河川堆積物である粘質土を除去する際に確認できた10列ほどの畝と畝間からなり、畝と畝の幅は0.8～１mと広い。近世に耕作された畑と考えられる。溝状遺構は土器から擦文文化期に掘られたものと推測される。また、台地縁辺部の上位・下位のⅢ層では、縄文時代晩期の小型（長径0.5～0.8m）の土坑10基・長径２m前後の楕円形の土坑２基など、Ⅴ層では集石１基なども検出した。

遺物はⅢ・Ⅴ層から出土した土器・石器と、旧河川中に溜まっていた土器・石器・木製品があり、総点数は約13,000点である。土器は台地からの連続で縄文時代中期が多いが、台地縁辺部で後期・晩期が目立ち、旧河川部では早期・後期・晩期が多い。少量だが縄文前期・続縄文・擦文も出土している。石器も台地同様、石斧と台石が多いが、石鏃・石錐・ナイフ・スクレイパー・たたき石・砥石など各種万遍なく出土する。旧河川部では縄文時代早期の土器に伴って、つまみ付ナイフの出土が多い。木製品は約200点で、近世相当の炉鉤・竪杵・曲物・桶側板など、縄文時代の所謂キウス型横槌の破片があるが、大半は杭や建材を含む加工痕のある丸木材・枝材・割材である。



遺構位置図



Ⅲ層遺構位置図（拡大図）

台地部調査状況

LH－4

LH－5

LH－9

畑跡

溝状遺構 1

杵

炉鈎

河道跡完掘

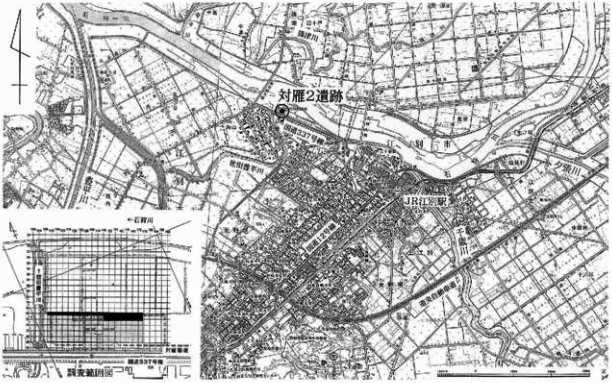
対雁（ついしかり）2遺跡（A－02－110）

事 業 名：石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：北海道開発局石狩川開発建設部
所 在 地：江別市工栄町地先（石狩川河川敷緑地内）
調査面積：2,200m²
発掘期間：平成15年5月6日～10月31日
調 査 員：佐藤和雄、鈴木　信、佐藤　剛、吉田裕吏洋、酒井秀治

遺跡の概要

対雁2遺跡はJR江別駅の北西約4kmの石狩川左岸に位置する。世田豊平川（旧豊平川）との合流地点よりも上流側の石狩川河川敷緑地内であり、標高約6～8mの自然堤防上の微高地に立地する。調査以前に運動公園の造成に伴う均平化を受けている。石狩川の河川改修が本格化する1970年代以前は対雁番屋、樺太アイヌ強制移住地、対雁小学校、榎本牧場などが所在した旧対雁村の中心部がこの付近にあり、江別の歴史を語る上で欠かせない重要な地域である。

遺跡調査の5ヵ年目にあたる今年度は、平成14年度着手部分の南側、2,200m²（127～148線の110m×67～70線の20m）の調査を行った。遺跡の地層は自然堤防の形成に伴い、世田豊平川へ向かって落ち込んでいる。遺構・遺物の検出する生活面は洪水のたびに土砂で覆われて新たな生活面が形成されており、平成13・14年度調査範囲では245面の生活面が確認された。同一の生活面は現地表面から標高6m付近まで、標高差約2.5mにわたって検出されている。また、地層確認のための大深度坑では標高2～4m付近の粗粒砂層から同時期の土器片が少量出土している。これまでの調査から遺跡は縄文時代晩期後半～続縄文時代後半にかけて形成されたと考えられるが、今年度調査範囲からは縄文晩期後葉～続縄文前葉のものが出土している。



遺跡の位置

遺構と遺物

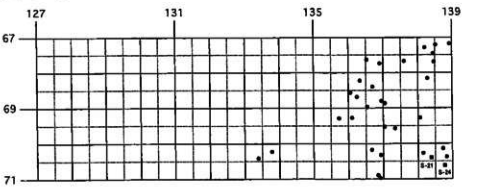
今年度の発掘調査範囲では、遺構が148線付近に土坑・136～146線付近に焼土が多く見られ、遺物が135～148線から出土している。その他の範囲からは遺構・遺物ははほとんど検出されなかった。

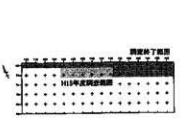
今年度に検出された遺構は土坑13基、焼土187ヵ所、集石５ヵ所などである。土坑は形状が円形や楕円形、規模は長径1.1～1.6m、深さ0.3～0.7mほどの大型のものが多く、多くは遺物を伴わない。明確に墓坑と判断されるものはなかった。土坑の分布は148ライン付近の南北方向に拡がって検出されている。埋没途中の土坑の窪みを利用したフレイク・チップ集中や炭化物・焼土ブロック・焼けた礫片の集中が検出されている。焼土は炭化物や骨片などを伴うものや廃棄されたようなもの、焼土の周囲に土器を据えるためと考えられる浅い小穴を伴うものも検出された。また、浅い円形の穴に多量の円礫を入れて火を焚いているものが検出されている。

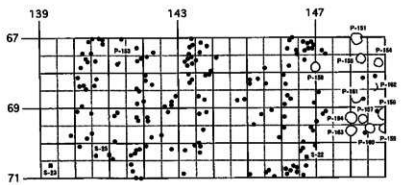
今年度と平成11年度のトレンチ調査で出土した遺物は平成15年末現在で土器等1,422点、石器等12,622点、合計14,044点である。土器は深鉢や鉢が出土し11個体が復元された。時期は縄文時代晩期後葉～続縄文時代前葉に属するものである。石器は石鏃、スクレイパー、たたき石が多く、石槍・ナイフ類、石錐などが少量出土している。石器等の石材としては、剝片石器が黒曜石、礫石器では安山岩・砂岩・珪岩が多い。

土器集中１の整理作業

土器集中１は平成11・12年度に調査を行い、土器片68,075点、石器等5,954点のほか、多量の炭化物・焼獣魚骨片が出土している。出土した土器は縄文晩期後葉の後半、大洞A′式に並行する時期のもので、続縄文初頭の砂沢式に並行する可能性もある。整理作業は昨年に引き続き土器の破片接合・石膏復元・実測（一部日立エンジニアリング株式会社に委託してのレーザー三次元計測）・写真撮影等を行っている。







遺構位置図

調査風景（南から）

土坑群検出状況（南西から）

P－158検出状況（東から）

土器出土状況（南東から）

F－1108検出作業風景（北西から）

館野遺跡（B－06－15）

事 業 名：高規格幹線道路函館江差自動車道建設用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部

所 在 地：上磯郡上磯町字館野３－３ほか

調査面積：5,750m²

発掘期間：平成15年５月６日～10月31日

調 査 員：佐川俊一、中田裕香、中山昭大、冨永勝也

遺跡の概要

館野遺跡は上磯町の市街地から南西約５km、下町沢川の右岸、標高約55mの海岸段丘上に位置する。館野から東には函館山と志海苔館があり、南西には矢不来・茂別館がある。館野にまつわる由来としては、江戸時代末期の松浦武四郎の旅行記に、下国氏（安藤氏）の築いた館跡があり、ゆえに館野通りと称すと記されている（松浦1864）。

大正時代に河野常吉が調査した「富川の墓趾」の報告によると、中段・土墓と、海に面する土墓があり、それについては蝦夷時代のチャシ跡、又は中世に下国氏（安藤氏）の築いた館跡。又、松前藩士の蛎崎三弥の館跡（1615年頃）。1869年に幕府脱走軍（榎本軍）が洋上の官軍に備え築いた土墓跡等の諸説があるとし、河野により幕府脱走軍の富川砲墓跡という考え方が示された（北海道庁1924）。

しかし、1987年の調査では砲台跡と標されていた部分が、1908年の渡島製瓦合名会社の煉瓦窯であったことが確認され（上磯町1988）、依然として土墓の成り立ちは不明である。調査区は砲台跡から北東に尾根状に続く小高い地形にかかる部分で、縄文時代の遺構を主としている。

富川墓の一部とおもわれる地形は、元は断層による地面の段差で、その地形が利用されたものであろう。南側斜面の土層では、まず縄文時代の自然堆積層の上に、尾根上からの遺構構築の際の排土が堆積し、その上に16世紀と推定される畑跡が造られる。また昭和の畑地造成で地形を平均にするために、尾根を削平して埋め立てた遺物を多く含む層がある。更に、この上に現代の耕作土がのる状況で、調査区の範囲で砲台跡に連なる尾根は形状を残さない状態だった。

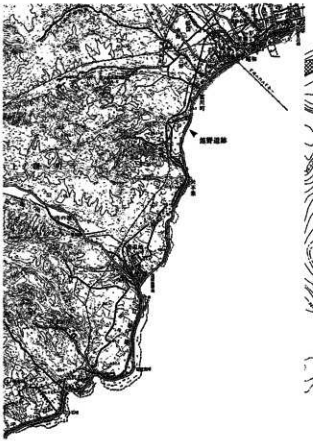
遺構と遺物

縄文時代中期末から後期にかけての遺構・遺物が主として検出され、遺物は現時点では集計済が約８万点、全体数は約30万点に及ぶ状況である。遺構は竪穴住居跡40軒、土坑49基、石囲い炉10基、焼土56ヵ所、石組み13基、Ｔピット７基が検出されている。その他に、土墓跡に関わる地形（中段・土墓）の地震の断層跡、傾斜地を造成し平坦面上に構築した建物跡などが検出されている。

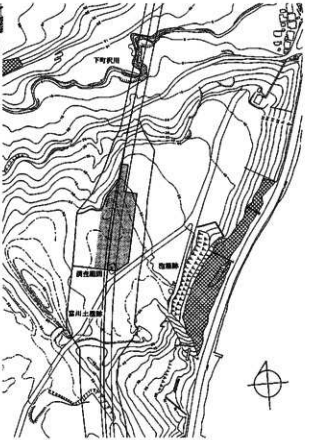
中期末から後期前葉にかけての竪穴の形状は、卵形の楕円形を呈し、先端ピットと石囲い炉、中央の左右壁側に垂直に立つ主柱穴と周溝を持ち、Ⅲ層中から80cm程の深さでローム面まで掘り込まれ、しっかりと貼床されているものが基本形態で、多くの竪穴がそれに属している。他には入り口のピットを持つ竪穴が４基確認された。

土坑のうちフラスコ状のものは直線状の断層に沿って南斜面に２列に配列されている。また、周溝と入り口をもつ竪穴のミニチュア的な土坑も確認された。石囲い炉（屋外炉）は溝状遺構Ｄ１を挟んで両側にみられ、焼土も同様の傾向を示している。石組みはそれらと関連して作られたものと思われるが、畑の耕作による抜きとりで配列の原形が確認できなかった。

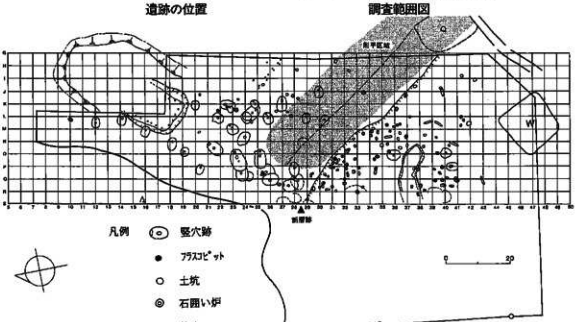
遺構に伴い出土する遺物はサイベ沢Ⅶ式から涌元式にかけてのもので時期幅がみられる。石器は特徴的なものとして青竜刀形石器の未製品が出土している。また、秋田県の伊勢堂岱遺跡でみられた後期の円盤状石製品が多く出土している。



道跡の位置



調査範囲図



遺構位置図

Nライン地形断面模式図

遺跡遠景（矢印）

住居跡群調査風景

フラスコ状ピット（P－24）

柱穴のあるフラスコ状ピット（P－45）

石列（手前　石組み12、奥　石組み11）

Ⅲ A 層調査風景

屋外炉（石囲い炉９）

建物跡

畑跡の一部と断面

大岩（おおいわ）5遺跡（B－13－6）

事 業 名：一般国道278号鹿部道路工事（鹿部バイパス）
委 託 者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部
所 在 地：茅部郡鹿部町字大岩107－18～20ほか
調査面積：1,800m²
発掘期間：平成15年5月6日～7月25日
調 査 員：笠原　興、福井淳一

遺跡の概要

遺跡は、鹿部町市街地の南西約3kmの海岸段丘上（標高約34m）に立地する。調査区南西側には常路（ところ）川が流れている。調査区周辺は昭和4年噴火の駒ケ岳a降下軽石層に厚く覆われ、ほぼ平坦な面となっているが、更新世末期には調査区北西側に河川が存在したものとみられる。

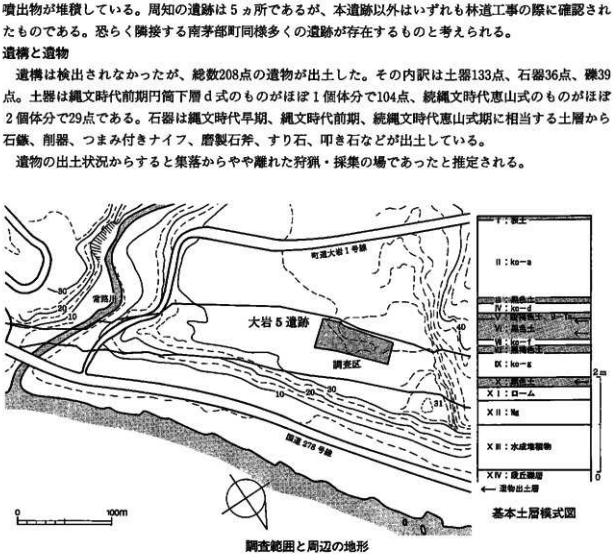
土層では駒ケ岳a降下軽石層、駒ケ岳d降下軽石層、白頭山－苫小牧火山灰層、駒ケ岳f降下軽石層、駒ケ岳g降下軽石層、濁川火砕流堆積物がみられ、それぞれの軽石層・火山灰層の間には黒色土が発達している。このうち遺物は白頭山－苫小牧火山灰層の下位、駒ケ岳g降下軽石層の下位の黒色土より出土した。ほかに、駒ケ岳g降下軽石層下位のローム層中に土石流堆積物が確認された。

なお、鹿部町において今回が初の発掘調査である。同町では駒ケ岳a降下軽石層をはじめ多くの火山噴出物が堆積している。周知の遺跡は5ヵ所であるが、本遺跡以外はいずれも林道工事の際に確認されたものである。恐らく隣接する南茅部町同様多くの遺跡が存在するものと考えられる。

遺構と遺物

遺構は検出されなかったが、総数208点の遺物が出土した。その内訳は土器133点、石器36点、礫39点。土器は縄文時代前期円筒下層d式のものがほぼ1個体分で104点、続縄文時代恵山式のものがほぼ2個体分で29点である。石器は縄文時代早期、縄文時代前期、続縄文時代恵山式期に相当する土層から石鏃、削器、つまみ付きナイフ、磨製石斧、すり石、叩き石などが出土している。

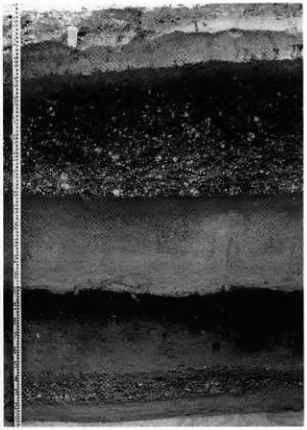
遺物の出土状況からすると集落からやや離れた狩猟・採集の場であったと推定される。



調査範囲と周辺の地形

遺跡遠景（南東から）

遺物出土状況（西から）



基本土層（北西から）

遺跡全景（西から）

米原（よねはら）4遺跡（J－14－42）

事 業 名：日高自動車道厚真門別道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部

所 在 地：勇払郡鵡川町字米原400－5ほか

調査面積：1,090m²

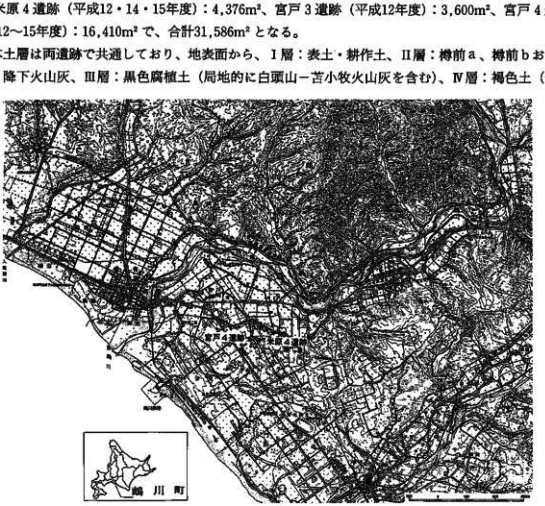
発掘期間：平成15年8月1日～10月31日

調 査 員：遠藤香澄、笠原　興、芝田直人、福井淳一、山中文雄

遺跡の概要

米原4、宮戸4遺跡はJR鵡川駅の東南約5kmに位置する。一級河川鵡川の支流であるイモッペ川の両岸、標高15～30mほどの河岸段丘とそれに続く氾濫原に立地している。右岸が米原4遺跡、左岸が宮戸4遺跡である。この地域の遺跡調査は平成12年度に始まり、今年度は4ヵ年目である。これまでに、『鵡川町　米原3遺跡・宮戸3遺跡・米原4遺跡』（北埋調報153）、『鵡川町　宮戸4遺跡』（北埋調報168）、『鵡川町　米原4遺跡(2)・宮戸4遺跡(2)』（北埋調報185）の3冊の報告書を刊行してきた。米原4、宮戸4遺跡ともに今年度で対象範囲の調査を終了し、これをもって日高自動車道建設に伴う鵡川町内の発掘調査をすべて完了した。これまでの各遺跡の総調査面積は、米原3遺跡（平成12年度）：7,200m²、米原4遺跡（平成12・14・15年度）：4,376m²、宮戸3遺跡（平成12年度）：3,600m²、宮戸4遺跡（平成12～15年度）：16,410m²で、合計31,586m²となる。

基本土層は両遺跡で共通しており、地表面から、Ⅰ層：表土・耕作土、Ⅱ層：樽前a、樽前bおよび有珠b降下火山灰、Ⅲ層：黒色腐植土（局地的に白頭山－苫小牧火山灰を含む）、Ⅳ層：褐色土（一部



遺跡位置図

この図は国土地理院発行の地形図、1：50,000「富川」（NK－54－9－13、昭和63年3月30日発行）と、鵡川町役場の1：50,000（承認番号　平成10、道複　第874号）を合成したものである。

は土壌化した樽前ｃ降下火山灰)、Ⅴ層：黒褐色腐植土、Ⅵ層：漸移層、Ⅶ層：支笏降下軽石の風化ローム、Ⅷ層：支笏降下軽石または円礫層となっている。遺物包含層は主にⅢ～Ⅴ層およびⅥ層の上位である。

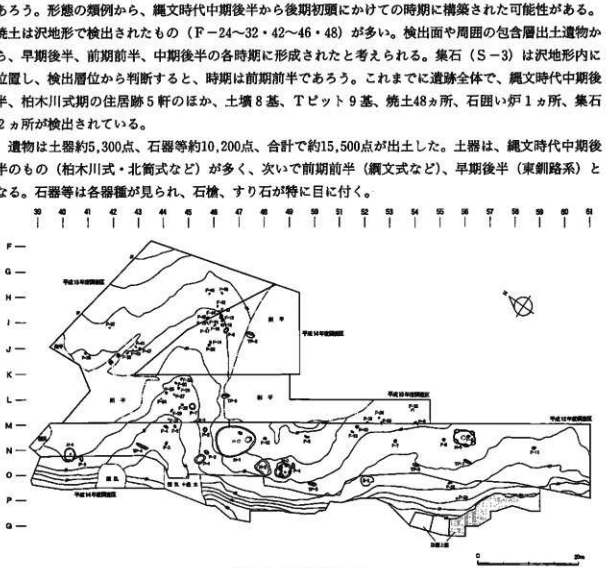
米原４遺跡は、平成12年度に町道米原１号の北側をＡ地区、南側をＢ地区として計2,311m² を調査した。平成14年度、Ｂ地区のイモッペ川を臨むクリアランス部分、北東側の町道米原11線に接する牧草地の計975m² を調査した。今年度は、町道米原11線下および牧草地の縁辺部分（845m²)、町道米原１号下部分（245m²）の計1,090m² を調査した。

遺構と遺物

今年度、米原４遺跡では、土坑２基、Ｔピット１基、焼土25ヵ所、集石１ヵ所が検出された。町道米原11線の下では、地形の高い部分が削平されていたため、遺物包含層は沢地形内にのみ確認された。

土坑は沢地形内で１基（Ｐ－7)、調査区南東側で１基（Ｐ－8）検出された。覆土の遺物などから縄文時代早期後半のものと見られる。Ｔピット（TP－9）は削平部分で検出されているが、周囲の地形から見て沢へと下る緩斜面上に構築されたと推測される。底面は溝状を呈し、杭跡などは確認されなかった。昨年度検出されたTP－8と立地、形態ともに類似しており、ほぼ同時期に構築されたものであろう。形態の類例から、縄文時代中期後半から後期初頭にかけての時期に構築された可能性がある。焼土は沢地形で検出されたもの（Ｆ－24～32・42～46・48）が多い。検出面や周囲の包含層出土遺物から、早期後半、前期前半、中期後半の各時期に形成されたと考えられる。集石（Ｓ－3）は沢地形内に位置し、検出層位から判断すると、時期は前期前半であろう。これまでに遺跡全体で、縄文時代中期後半、柏木川式期の住居跡５軒のほか、土壙８基、Ｔピット９基、焼土48ヵ所、石囲い炉１ヵ所、集石２ヵ所が検出されている。

遺物は土器約5,300点、石器等約10,200点、合計で約15,500点が出土した。土器は、縄文時代中期後半のもの（柏木川式・北筒式など）が多く、次いで前期前半（綱文式など)、早期後半（東釧路系）となる。石器等は各器種が見られ、石槍、すり石が特に目に付く。



米原４遺跡　遺構位置図

調査状況（南東から）

P－7完掘（南西から）

TP－9完掘（南東から）

町道米原11線下完掘状況（北西から）

宮戸（みやと）4遺跡（J－14－40）

事 業 名：日高自動車道厚真門別道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部
所 在 地：勇払郡鵡川町字宮戸179－4ほか
調査面積：5,950m²
発掘期間：平成15年8月1日～10月31日
調 査 員：遠藤香澄、笠原　興、芝田直人、福井淳一、山中文雄

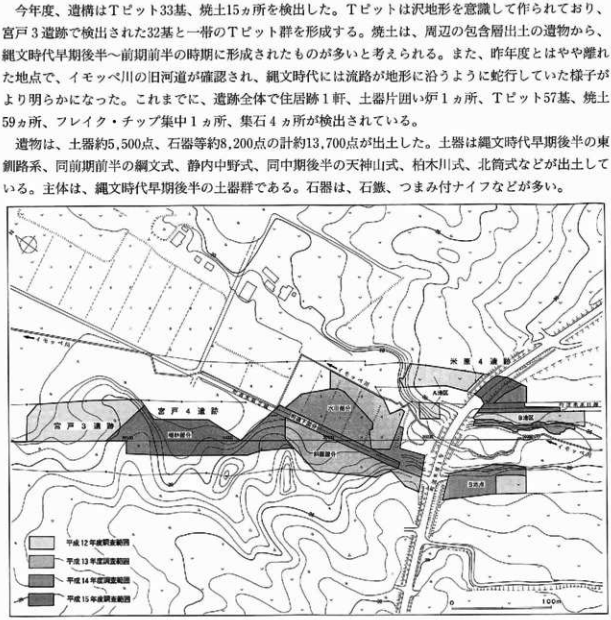
遺跡の概要

宮戸4遺跡は、平成12～14年度、町道米原1号の南側（S地点）、町道米原2線に接した斜面部分およびイモッペ川の改修区域（水田部分）の計10,460m²を調査した。今年度は、平成12年度調査の宮戸3遺跡と接する樹林部分（5,150m²）、町道米原2線下（800m²）の計5,950m²を調査した。

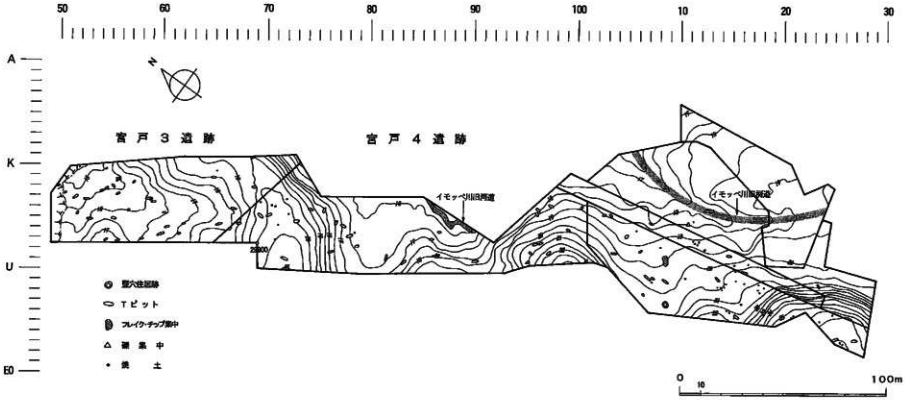
遺構と遺物

今年度、遺構はTピット33基、焼土15ヵ所を検出した。Tピットは沢地形を意識して作られており、宮戸3遺跡で検出された32基と一帯のTピット群を形成する。焼土は、周辺の包含層出土の遺物から、縄文時代早期後半～前期前半の時期に形成されたものが多いと考えられる。また、昨年度とはやや離れた地点で、イモッペ川の旧河道が確認され、縄文時代には流路が地形に沿うように蛇行していた様子がより明らかになった。これまでに、遺跡全体で住居跡1軒、土器片囲い炉1ヵ所、Tピット57基、焼土59ヵ所、フレイク・チップ集中1ヵ所、集石4ヵ所が検出されている。

遺物は、土器約5,500点、石器等約8,200点の計約13,700点が出土した。土器は縄文時代早期後半の東釧路系、同前期前半の綱文式、静内中野式、同中期後半の天神山式、柏木川式、北筒式などが出土している。主体は、縄文時代早期後半の土器群である。石器は、石鏃、つまみ付ナイフなどが多い。



年度別調査範囲と周辺の地形



宮戸３遺跡・宮戸４遺跡　遺構位置図

町道下調査状況（南から）

TP－41完掘（東から）

調査区全景（北西から）

ポンアヨロ４遺跡（Ｊ－10－41）

事 業 名：一般国道36号登別市登別拡幅工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部

所 在 地：白老郡白老町字虎杖浜335－27ほか

調査面積：284m²

発掘期間：平成15年６月９日～７月18日

調 査 員：遠藤香澄、芝田直人、山中文雄

遺跡の概要

ポンアヨロ４遺跡は、白老町の南西部、虎杖浜地区に所在する。同地区周辺には、クッタラカルデラより噴出された軽石流などにより、太平洋へ細長く延びる台地が形成されている。遺跡は台地を開析して流れるポンアヨロ川の左岸、現標高約20～30mの南西向き緩斜面に位置する。斜面を登りきった台地頂部（現標高約45～50m）には、縄文時代前期の集落と貝塚で知られる虎杖浜２遺跡がある。

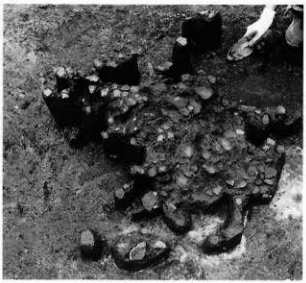
白老町教育委員会による平成10年度の調査（3,500m²）では、縄文時代中期後葉の住居跡４軒、同早期後葉の土坑と焼土のまとまり10ヵ所などが検出されている。遺物は土器11,992点、石器等18,513点が出土しており、とくに縄文時代早期後葉の中茶路式土器が多いようである（『虎杖浜２・ポンアヨロ４遺跡』白老町教育委員会）。

今年度は当センターによって、ポンアヨロ川の左岸部分284m²について調査が行われた。調査区内の土層はⅠ～Ⅵに分けられ、このうちの有珠ｂテフラ層より下位の黒色腐植層（Ⅳ層と呼称）が遺物包含層にあたる。Ⅳ層の中位には、駒ケ岳ｇテフラ（Ko－g、「幌別火山灰」）が部分的にみとめられ、それより下位（Ⅳb層と呼称）で縄文時代早期の土器（中茶路式）などが出土している。なお調査区の西側は、ポンアヨロ川の旧河道や氾濫原となっており、Ⅳ層は確認されなかった。遺構は今回の調査区内では検出されていない。

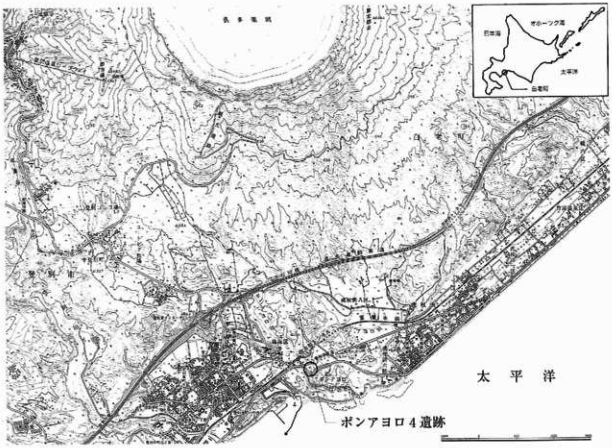
遺物

遺物は約1,200点出土している。土器は縄文時代早期の中茶路式が主体で、他に貝殻文の施文されたもの（物見台式）、東釧路Ⅱ式、柏木川式、北筒式が少数みられる。石器等はわずかで、たたき石、すり石、石皿、黒曜石製の剥片、凝灰岩の大きな盤状礫がある。

調査状況（北西から）

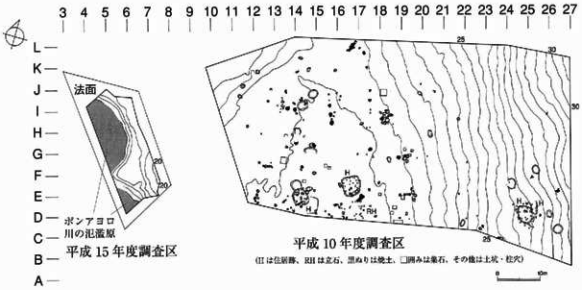


土器出土状況（Ⅳb層）



遺跡位置図

この図は国土地理院発行2.5万分の１地形図「登別温泉」（S63.2.28発行）を複製して縮小したものである



遺構位置図

白老町教育委員会1999『虎杖浜２・ポンアヨロ４遺跡』から作成

穂香竪穴群（ほにおいたてあなぐん）（N－01－34）

事 業 名：一般国道44号根室道路工事に伴う穂香竪穴群遺跡発掘調査
委 託 者：国土交通省北海道開発局釧路開発建設部
所 在 地：根室市穂香172－１ほか
調査面積：3,440m²
発掘期間：平成15年５月８日～９月19日
調 査 員：越田雅司、愛場和人

遺跡の概要

穂香竪穴群は根室半島の西部、根室市の中心部から南西に約５km、根室湾に面した第二ホニオイ川左岸の標高15mほどの舌状台地上にある。遺跡から北方には国後島や、その背後に位置する知床半島の山々を望むことができる。根室半島の地形は、標高約10mから50mの間でいくつかの段丘面が形成されているが、段丘崖が不明瞭で、全体として台地状となっている。この台地は、皿状の浅い谷や小河川などで区分され細かな起伏が見られる。遺跡のある台地も第二ホニオイ川とその支流に開析され、西から東に張り出した形状となり、調査区の西側には湧水地と小沢がある。遺跡の周辺には、海岸部や根室湾に注ぐ小河川沿いの台地上に方形や円形の窪みが確認できる遺跡が存在する。海岸段丘上に幌茂尻ポントマリ竪穴群、幌茂尻東竪穴群、穂香３竪穴群などがある。また、根室市街地方向へ約1.5kmにあるキナトイシ川右岸の台地上には、国指定史跡西月ヶ岡遺跡がある。ほかにチャシ跡や、貝塚などが確認されている。

基本土層はⅠ層：表土・耕作土、Ⅱ層：黒色土（おもに擦文時代の包含層）、Ⅲ層：明褐色土（おもに縄文時代中期の遺物包含層）、Ⅳ層：摩周火山起源の火山灰層、Ⅴ層：黒色土（縄文時代早期以前の遺物包含層）Ⅵ層：黄褐色ローム質土である。

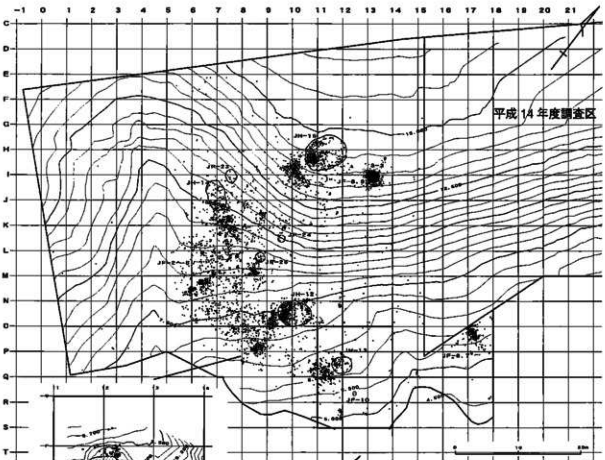
平成13年に開始した調査は今年度が最終年度で、３年間の調査で18,690m² を対象に、擦文時代後期の竪穴住居跡26軒・土坑１基・焼土９ヵ所・集石３ヵ所、縄文時代の中期から後期の竪穴住居跡15軒・土坑25基・盛土10ヵ所・焼土９ヵ所、縄文時代早期の焼土２ヵ所を調査した。調査区域外には方形の竪穴の窪みを20基ほど確認できる。平成13年度には動物意匠の付いた北筒Ⅲ式土器（根室市文化財指定）や擦文時代後期のガラス玉の出土資料があり、縄文時代中期から後期や擦文時代後期の集落跡、今年度の縄文時代早期の資料など、貴重な資料が得られた。

遺構と遺物

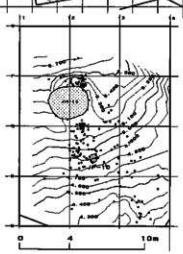
今年度は、調査範囲の西側の台地上と斜面、斜面から低湿地にかかる平坦面を調査した。遺物出土状況から南側（低湿地側）に範囲を拡張して3,440m² を調査した。昨年度調査区から続く台地上と斜面、低位の平坦面に遺構と遺物は大部分が検出され、小沢を挟んだ西側の台地へと続く斜面からは、Ⅱ・Ⅲ層、Ⅴ層ともに散発的に土器片や石器が出土しただけである。遺物の総点数は20,847点で、内訳は縄文式土器などが11,219点、剥片石器3,375点、礫石器345点、礫5,851点、炭化物・鉄製品ほか57点である。土器はほとんどが縄文時代中期のもので、ほかに擦文土器や続縄文式土器が若干出土している。

遺構は、縄文時代中期の竪穴住居跡４軒、土坑３基、焼土８ヵ所、縄文時代早期の焼土２ヵ所、石器集中などを調査した。竪穴住居跡はすべてモコト式土器を伴う。台地上に１軒、低位の平坦面から３軒が検出された。土器は住居跡とその周辺で出土し、ほかに石鏃、掻器、石斧、石製品などが出土した。早期の遺構と遺物は、摩周火山起源の火山灰（Ma－f～Ma－j）直下のⅤ層上面で、木葉形の両面調整石器・石槍、舌部のある石槍が40点ほどまとまって出土し、その周辺で焼土、東釧路Ⅱ式の土器小片のほかに石鏃、石刃鏃１点、台石などが出土した。平成13年度には石斧、平成14年度には黒曜石製の剥片がⅤ層より出土したが、早期の土器が出土したのは今年度が初めてである。

遺跡の位置と周辺の遺跡（国土地理院発行1万5千分の一地形図「根室東部」を使用）



Ⅱ・Ⅲ層遺構・遺物分布図
（等高線はⅡ層上面）



Ⅴ層遺物分布図（等高線はⅤ層上面）

調査状況

JH－12

JH－12土器出土状況

Ⅴ層石器出土状況

Ⅴ層調査状況

白滝遺跡群

事 業 名：一般国道450号白滝丸瀬布道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：国土交通省北海道開発局網走開発建設部

調査面積：10,400m² （3遺跡合計）

発掘期間：平成15年5月7日～10月24日

整理期間：平成15年4月1日～平成16年3月31日

調 査 員：高橋和樹、鈴木宏行、愛場和人、直江康雄

調査遺跡一覧

遺 跡 名	所 在 地	調査面積(m²)
旧白滝5遺跡(Ⅰ－20－28)	紋別郡白滝村字旧白滝417	7,340
旧白滝8遺跡(Ⅰ－20－31)	紋別郡白滝村字旧白滝419、429、442、443	1,160
中島遺跡(Ⅰ－19－34)	紋別郡丸瀬布町南丸48、52	1,900
	合計	10,400

継続整理遺跡一覧

遺 跡 名	所 在 地	遺物点数(点)
奥白滝11遺跡(Ⅰ－20－65)	紋別郡白滝村字上白滝62－2	2,376
服部台2遺跡(Ⅰ－20－13)	紋別郡白滝村字奥白滝18－3	798,030
奥白滝1遺跡(Ⅰ－20－50)※	紋別郡白滝村字上白滝183－2、183－5	182,921
上白滝8遺跡(Ⅰ－20－91)	紋別郡白滝村字上白滝181－4、182－2、182－3	1,349,748
上白滝6遺跡(Ⅰ－20－89)※※	紋別郡白滝村字上白滝122－3、123－3	5,082
白滝第30地点遺跡(Ⅰ－20－6)	紋別郡白滝村字白滝382－4	4,627
白滝8遺跡(Ⅰ－20－58)	紋別郡白滝村字白滝146－1、146－2	4,036
白滝18遺跡(Ⅰ－20－92)	紋別郡白滝村字白滝145、139－1	47,825
白滝3遺跡(Ⅰ－20－36)	紋別郡白滝村字白滝106他	41,281
旧白滝9遺跡(Ⅰ－20－32)	紋別郡白滝村字旧白滝442	28,318
旧白滝8遺跡(Ⅰ－20－31)	紋別郡白滝村字旧白滝419、429、442、443	490,299
下白滝遺跡(Ⅰ－20－23)	紋別郡白滝村字下白滝99－1	156,514
	合計	3,111,057

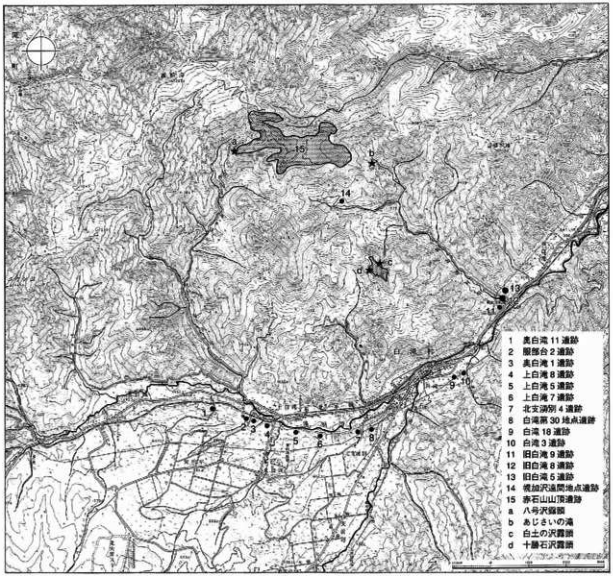
※　平成12年度調査分
※※　平成13年度調査分

遺跡群の概要

白滝村は、北海道の屋根といわれる大雪山系の東北山麓にあり、市街地の北西約6kmには国内有数の黒曜石産出地として知られる赤石山がある。村内を東西に流れる湧別川とその支流の支湧別川の河岸段丘上には、旧石器時代の遺跡が多数所在し、それらは「白滝遺跡群」と総称されている。特に赤石山に通じる八号沢川と湧別川の合流点付近には、白滝第13地点遺跡をはじめ服部台、白滝第32地点、白滝第33地点遺跡など学史的に有名な遺跡が集中している。また、国指定史跡「白滝遺跡」（白滝第13地点遺跡）は、1997年に新たに約20万m²が追加され、国指定史跡「白滝遺跡群」として名称変更された。

今年度はその史跡白滝遺跡群よりさらに湧別川を下った、幌加湧別川との合流点付近の旧白滝8・旧白滝5遺跡、さらに13kmほど下流の武利川との合流点付近にある中島遺跡の調査を行った。

以下各遺跡の位置および地形、出土遺物の概要を説明する。



赤石山（原石山）と遺跡の位置

旧白滝５遺跡

遺跡は白滝市街から北東へ約3.5km、湧別川との合流点から約400m遡った幌加湧別川の左岸に位置している。高位部（標高390m前後）と中位部（標高360～370m）の上下２段の河岸段丘面とその間の斜面部からなり、それぞれ地形、堆積状況や出土遺物が異なっている。中位部は上部に斜面堆積層があり、高位部に比べて傾斜が強い。上白滝地区の段丘面と比較すると、高位部は天狗平面、中位部は上白滝面に対応する。湧別川との比高は高位部が70m、中位部が40～50mである。

基本土層は大まかにⅠ層＝表土、Ⅱ層＝黄褐色土（包含層）、Ⅲ層＝礫層の順に堆積している。遺物包含層であるⅡ層は、地点によって不明瞭ながらⅡa、Ⅱb、Ⅱc層に分層できる。高位部の土層は、下層の礫が表土まで上昇するなど周氷河現象による影響が激しい。斜面部、中位部ではⅡ層中に基盤層の粘板岩礫が混じり、下部に行くに従い礫の比率が高くなっている。

遺構は高位部で焼土３ヵ所、炭化木片集中２ヵ所、中位部で炭化木片集中２ヵ所が検出された。どちらもⅡ層の下部から検出される傾向がある。

遺物はすべて石器類のみで、ほとんどが旧石器時代に属する。総点数は30万点以上にのぼると思われ、このうち出土地点を計測した遺物は43,221点である。高位部、斜面部、中位部で出土遺物、分布の傾向が異なるので以下に分けて説明する。

高位部は細石刃、細石刃核（峠下型中心）、削片、舟底形石器、尖頭器、両面調整石器、彫器、削器、錐形石器、台形石器、石刃、石刃核、石核等が出土した。細石刃関連の資料が最も多く、今後の接合作業を通して多角的な観察を行っていきたい。石核の中には打面転移を頻繁に繰り返すサイコロ状のものや素材腹面を求心状に剥離するものがみられ、後期旧石器時代前半期の石器群に比定できる。全体的に非常に濃密な分布状態で、細かな石器ブロックの認定が困難である。各時期の石器群が混在して出土していると思われる。

斜面部は大きく高位部からの濃密な分布が続く南側（C・D21・22区、E20～22区、F・I18～22区、G・H17～22区）と、単独で確認された北側（G～J31区）に分けられる。南側は高位部とほぼ同様の石器が、北側は大型の石刃核を伴う石器群が出土した。分布はブロック全体が斜面方向に細長い形状で確認された。

中位部は小型で精緻な尖頭器を主体として、舟底形石器、石刃核が出土した。尖頭器は押圧剥離と鋸歯状の縁辺が特徴的で、道内での類例が少なく、石器組成や石器群の位置付けには慎重な検討を要する。分布は斜面部と同様、ブロック全体が傾斜方向に細長い形状で確認された。

旧白滝8遺跡

遺跡は白滝市街から北東へ約3.4km、湧別川との合流点から約400m遡った幌加湧別川の左岸で、標高は333m前後、旧白滝5遺跡の西側斜面の下に位置している。調査は幌加湧別川に向かって緩やかに傾斜する面と幌加湧別川の浸食を受けた斜面、及び旧河道部を対象に行った。平坦面と旧河道部の比高は約1.5mである。

土層は昨年度から継続してⅠ層＝耕作撹乱層、Ⅰa層＝黒褐色土（包含層・擦文、続縄文）、Ⅰb層＝暗褐色土（包含層・続縄文初頭）、Ⅱa層＝黄褐色粘土、Ⅱb層＝黒褐色土、Ⅱc層＝黄褐色砂混じり粘土、Ⅲ層＝砂層（包含層・続縄文以前）、Ⅳ層＝砂礫層、Ⅴ層＝礫層と分層している。今年度の調査区では耕作によってⅠa層が削平を受けているところが多く、包含層は平坦面ではⅢ層、旧河道部ではⅠb層が残存していた。

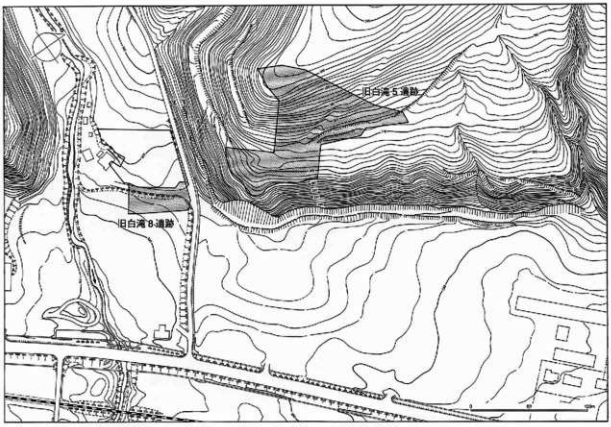
遺構は斜面から旧河道部のⅠb層中から焼土1ヵ所、フレイクチップ集中域（FC）6ヵ所、平坦面のⅢ層中からFC1ヵ所が検出された。

遺物の総点数は38,973点である。大部分が石器類でⅠ層、Ⅰb層から出土している。土器はⅠ層から擦文土器片が3点出土した。石器は石鏃、スクレイパー、両面加工ナイフ及びその製作途中とみられる両面調整石器、石核が出土した。

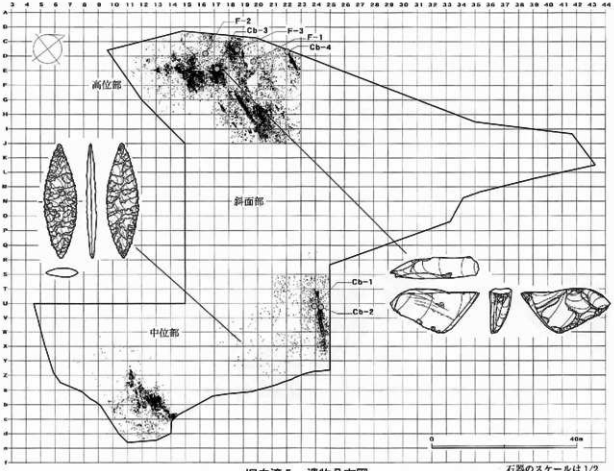
中島遺跡

遺跡は丸瀬布市街から南西へ2.5km、湧別川の右岸で武利川との合流点にはさまれた山地の末端部にある河岸段丘上に位置している。標高は210m前後で、湧別川との比高は約15mである。地形は比較的平坦であるが、段丘崖側は自然堤防とみられる礫層が表土付近まで堆積しているためやや高い。土層はⅠ層＝耕作撹乱土層、Ⅱ層＝礫層の順に堆積し、包含層はすべて撹乱を受けていた。

遺構は自然堤防の南東側でFCが1ヵ所検出されている。遺物の総点数は1,692点で大部分が黒曜石製の石器である。土器は縄文晩期後葉の小破片が84点出土し、一部に赤色顔料の付着がみられる。石器は石鏃、スクレイパー、両面調整石器、二次加工ある剥片が出土した。



旧白滝5・旧白滝8　調査区域図



旧白滝5　遺物分布図

石器のスケールは1/2

旧白滝５　高位部調査状況

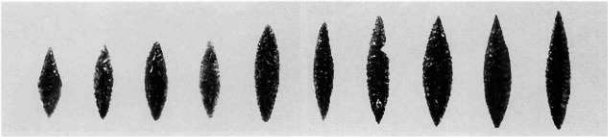
旧白滝５　高位部遺物出土状況

旧白滝５　高位部遺物出土状況

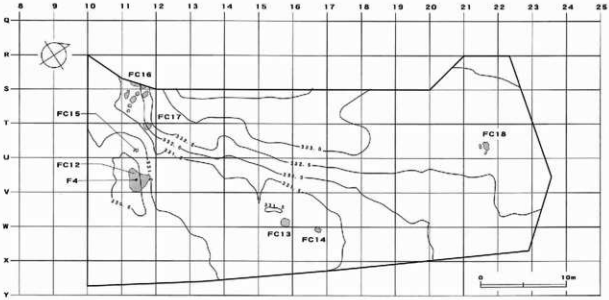
旧白滝５　高位部遺物出土状況

旧白滝５　斜面部遺物出土状況

旧白滝５　高位部出土遺物（1/2）



旧白滝５　中位部出土遺物（1/2）

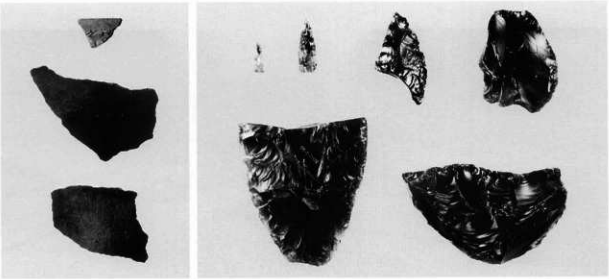


旧白滝８　遺構位置図

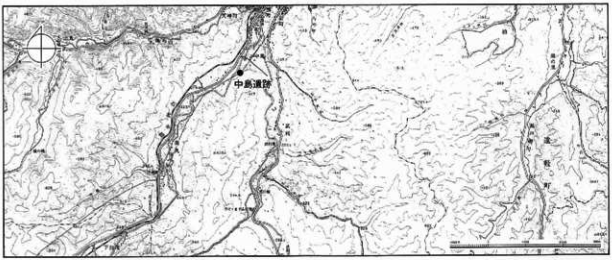
旧白滝８　調査状況

旧白滝８　Ｉb層調査状況

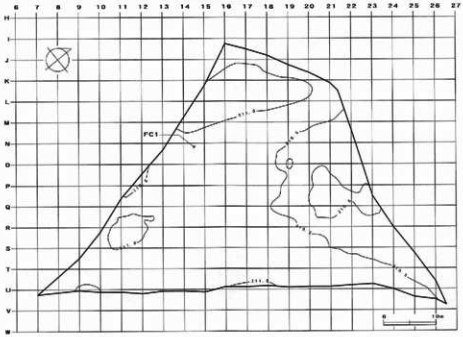
旧白滝８　FC14遺物出土状況



旧白滝8　出土遺物（1/2）



中島遺跡の位置

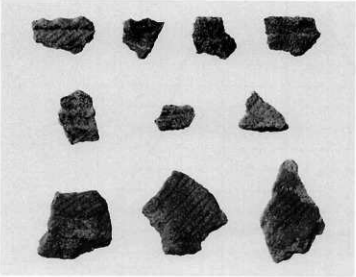


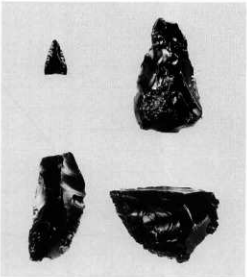
中島　遺構位置図

中島　調査状況

中島　調査状況

中島　FC 1 遺物出土状況





中島　出土遺物（1/2）

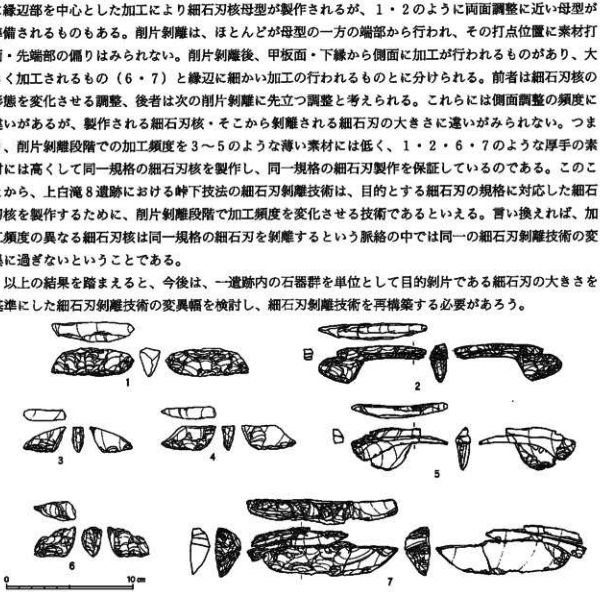
白滝遺跡群の整理

今年度は服部台２、奥白滝１、上白滝８、白滝３・８・18、旧白滝８・９、下白滝遺跡の二次整理と今年度調査した旧白滝５遺跡の一次整理を行った。二次整理については上白滝８遺跡を中心とした図化・データ整理、服部台２、白滝３・８・18遺跡の接合作業を行い、旧白滝８・９、下白滝遺跡に関しては接合・図化・データ整理を行った。

今年度主に作業を行った上白滝８遺跡は学史的に有名な白滝第13地点遺跡の南側に隣接する一段高い段丘面上に立地している。黒曜石原産地遺跡の性格を反映して約135万点、3.5トンの石器類が出土し、白滝遺跡群の中でも最大級の遺跡である。遺物はサイコロ状の石核、広郷型ナイフ形石器、峠下型細石刃核、大型石刃、幅広有舌尖頭器、大小の舟底形石器などが出土し、複数の石器群が確認されているが、重複・連続する分布状況、広範囲にわたる接合関係もみられることから石器群の厳密な分離は困難である。ここでは、接合資料によって確認できた上白滝８遺跡出土の峠下技法による細石刃剥離技術について特徴を述べる。

素材は石刃・縦長剥片が主体的に利用され、幅広の剥片が利用されることもある。３～５のような主に縁辺部を中心とした加工により細石刃核母型が製作されるが、１・２のように両面調整に近い母型が準備されるものもある。削片剥離は、ほとんどが母型の一方の端部から行われ、その打点位置に素材打面・先端部の偏りはみられない。削片剥離後、甲板面・下縁から側面に加工が行われるものがあり、大きく加工されるもの（６・７）と縁辺に細かい加工の行われるものとに分けられる。前者は細石刃核の形態を変化させる調整、後者は次の削片剥離に先立つ調整と考えられる。これらには側面調整の頻度に違いがあるが、製作される細石刃核・そこから剥離される細石刃の大きさに違いがみられない。つまり、削片剥離段階での加工頻度を３～５のような薄い素材には低く、１・２・６・７のような厚手の素材には高くして同一規格の細石刃核を製作し、同一規格の細石刃製作を保証しているのである。このことから、上白滝８遺跡における峠下技法の細石刃剥離技術は、目的とする細石刃の規格に対応した細石刃核を製作するために、削片剥離段階で加工頻度を変化させる技術であるといえる。言い換えれば、加工頻度の異なる細石刃核は同一規格の細石刃を剥離するという脈絡の中では同一の細石刃剥離技術の変異に過ぎないということである。

以上の結果を踏まえると、今後は、一遺跡内の石器群を単位として目的剥片である細石刃の大きさを基準にした細石刃剥離技術の変異幅を検討し、細石刃剥離技術を再構築する必要があろう。



上白滝８遺跡出土峠下型細石刃核・接合資料

北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）関係の遺跡

北海道縦貫自動車道は、道南部の七飯町から室蘭市・苫小牧市・札幌市を経由し、道北部の名寄市へと至る総延長488kmの自動車専用道路である。このうち七飯～長万部間については、平成２年度に道路公団札幌建設局（当時）から北海道教育委員会へ埋蔵文化財についての事前協議がなされ、同年４月から長万部町において所在確認調査、平成５年度から順次試掘調査が実施された。八雲町までの試掘調査及び本調査は平成13年度までにほぼ終了し、発掘調査は森町内に移行した。

当センターによる森町内の調査は、平成13年の濁川左岸遺跡、本内川右岸遺跡から開始され、今年度までに14ヵ所実施した。このうち本茅部１遺跡、本内川右岸遺跡、濁川左岸遺跡の一部については報告書を刊行している。

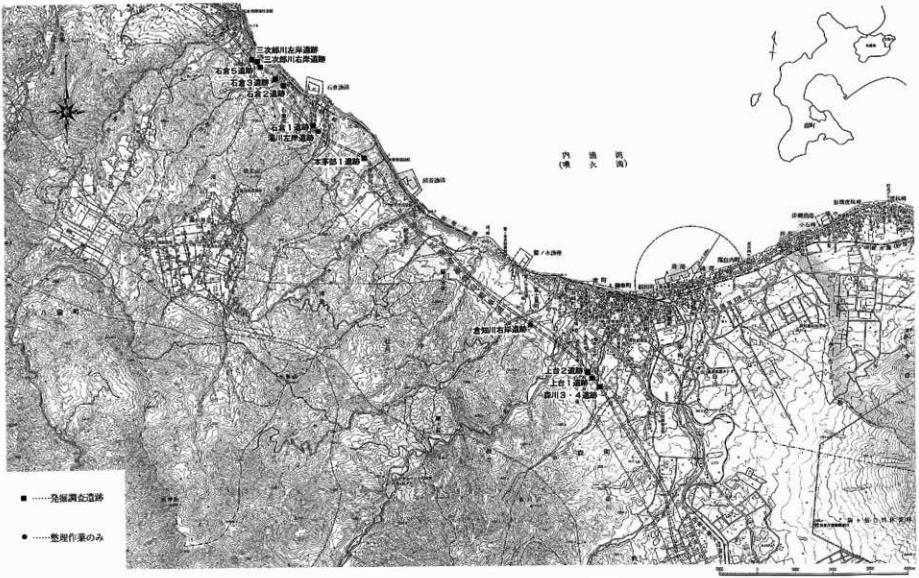
平成15年度は、三次郎川左岸遺跡、三次郎川右岸遺跡、石倉５遺跡、石倉３遺跡、石倉２遺跡、石倉１遺跡、本茅部１遺跡、上台２遺跡、上台１遺跡、森川４遺跡、森川３遺跡の11ヵ所を調査し、その総調査面積は26,060m² である。石倉３遺跡、石倉２遺跡、上台１遺跡の調査は終了し、その他については平成16年度以降に調査を継続する予定である。

今年度の調査では、三次郎川右岸遺跡からは縄文時代の集落跡が、石倉３遺跡では配石を伴う土坑、石倉２遺跡のＡ地区では大型フラスコ状ピット・Ｔピット、Ｂ地区からは縄文時代中期の樹林式期の集落跡、上台２遺跡では中世から近世と考えられる畑跡が、上台１遺跡では縄文時代後期初頭と考えられる木製品を伴う土坑等が検出されている。

濁川左岸遺跡・倉知川右岸遺跡については整理作業が実施され、今後、道南部の縄文時代中期～後期初頭を考える上で貴重な資料が数多く得られている。

平成15年度北海道縦貫自動車道関係の遺跡の発掘調査

遺跡名	調査面積（m²）	主な時期	特記事項
三次郎川左岸遺跡	1,420	縄文時代中期～後期	－
三次郎川右岸遺跡	2,600	縄文時代中期～後期	縄文中期後葉から後期初頭、埋甕を持つ竪穴住居群
石倉５遺跡	962	－	－
石倉３遺跡	3,670	縄文時代後期初頭	配石遺構
石倉２遺跡	2,324	縄文時代中期後半	樹林式期の急峻な尾根状の集落跡
石倉１遺跡	1,900	縄文時代中期～後期	斜面に投げ捨てられた遺物
本茅部１遺跡	498	縄文時代中期後半・晩期	
上台２遺跡	5,026	中世～近世	緩斜面地形を利用した大規模な畑跡
上台１遺跡	6,200	縄文時代中期～後期	河川に面した配石を伴う土坑群
森川４遺跡	1,400	縄文時代中期後半	森川河畔の作業場
森川３遺跡	60	－	－
濁川左岸遺跡	整理作業	縄文時代後期前葉	涌元式土器
倉知川右岸遺跡	整理作業	縄文時代後期前葉	トリサキ式土器



2003年度北海道縦貫自動車道（森町内）調査遺跡位置図

三次郎川左岸遺跡（B－15－38）

事 業 名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団北海道支社

所 在 地：茅部郡森町字石倉町610～24ほか

調査面積：1,420m²

発掘期間：平成15年7月14日～10月28日

調 査 員：熊谷仁志、鎌田　望、田中哲郎、新家水奈、大泰司統

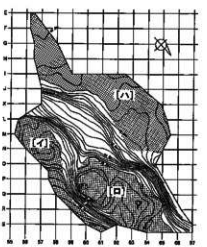
遺跡の概要

遺跡は、森市街地から11.5km、北西方向に位置する。森町管内北西部の河川は渡島山脈から北東方向に流れ、内浦湾に注ぎ込んでいる。三次郎川もその一つで、八雲町との行政境界となる茂無部川、市街地側に本内川を挟んで、三番目の河川で、流路延長5.1kmの小河川である。遺跡はその両岸の河岸段丘上に所在し、「左岸遺跡」、「右岸遺跡」と三次郎川で区分けしている。調査地点は、河口から直線距離で約0.4km遡った地点で、標高35～43mほどである。

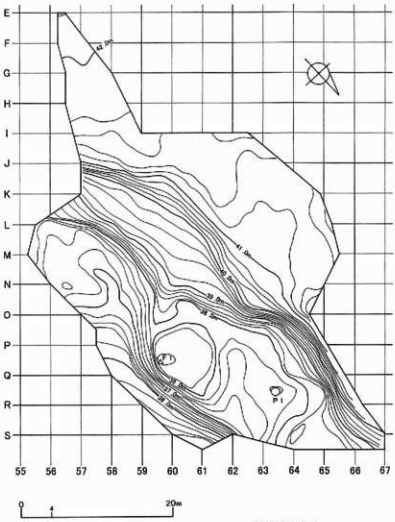
基本土層は、Ⅰ層：表土層、Ⅱ層：駒ヶ岳火山灰ｄ層（Ko－d）、Ⅲ層：黒褐色土層、Ⅳ層：白頭山－苫小牧火山灰（B－Tm）層、Ⅴ層：黒色土層、Ⅵ層：漸移層、Ⅶ層：駒ヶ岳火山灰ｇ層（Ko－g）、Ⅷ層：濁川火砕流堆積物の水成二次堆積物である。Ⅳ層のB－Tmは部分的である。Ⅴ層の上部は乾燥によって亀裂がはいり、下部は粘性に富んでいることから、Ⅴa・Ⅴbと分層した。だが、場所によっては明確にならない部分もある。また、Ⅶ層とⅧ層間には明褐色の腐植土がみられた。Ⅷ層はローム質土の黄褐色土となるところが多いが、砂礫が表出する部分も見られた。遺物包含層は、基本的にⅤ層およびⅥ層である。

調査は、試掘調査の結果から、重機による遺構確認調査と、人力による通常の発掘調査とを併用した。また、工事工程との調整により、大きく2回に分けて調査は実施している。遺跡は、大きく3つの平坦面と、その間の斜面地で構成される。下位から［イ］、［ロ］、［ハ］と呼称すると、今回の調査での遺構は、すべて［ロ］の平坦面で検出され、土坑1基（P－1）、焼土1ヵ所（F－1）である。全体的に出土遺物は少なく、現場での概観では縄文時代中期から後期を主体とし、前期や統縄文時代の遺物もみられた。

基本土層模式図



平坦面の細分と呼称



[凡 例]
P … 土 坑
F … 焼 土
▲（Va層確認のもの）
△（Vb層確認のもの）

遺構位置図

調査状況

P－1

三次郎川右岸遺跡（B－15－37）

事 業 名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団北海道支社

所 在 地：茅部郡森町字石倉町516ほか

調査面積：2,600m²

発掘期間：平成15年7月14日～10月28日

調 査 員：熊谷仁志、鎌田 望、田中哲郎、新家水奈、大泰司統

遺跡の概要

遺跡は、三次郎川を挟んで左岸遺跡の対岸にある。より標高の高い南東側の段丘上には石倉5遺跡が所在する。三次郎川右岸の段丘面は良く発達しており、左岸より広範な平坦面をもっている。調査範囲は、大きく標高38～43mほどの段丘斜面と、43～45mほどの平坦面で構成される。また、平坦面には三次郎川の屈曲した流路痕跡が明瞭に残り、高低少なくとも2段の平坦面に分かれている。その高低差は上流側に顕著で、最大1m前後ある。流路痕跡はC字状に三次郎川側に開口する形となり、A～Eライン間と、H～Nライン間が該当する。この流路痕跡間は三次郎川の浸食を透れ、古い高位の平坦面を残すことになる。今回の調査では、三次郎川から離れるにしたがい遺構・遺物の出現頻度は低くなるようである。

今回の調査範囲の北東側については、来年度以降の調査が予定されている。

基本土層は左岸遺跡と同様で、Ⅰ層：表土層、Ⅱ層：駒ヶ岳火山灰d層（Ko－d）、Ⅲ層：黒褐色土層、Ⅳ層：白頭山－苫小牧火山灰（B－Tm）層、Ⅴ層：黒色土層（Va・Vbと分層）、Ⅵ層：漸移層、Ⅶ層：駒ヶ岳火山灰g層（Ko－g）、Ⅷ層：濁川火砕流堆積物の水成二次堆積物である。また、Ⅶ・Ⅷ層間には僅かながら明褐色の腐植土がみられたが、遺物包含層は基本的にⅤ層およびⅥ層である。Ⅴ層からの遺物出土量が多い。

遺構と遺物

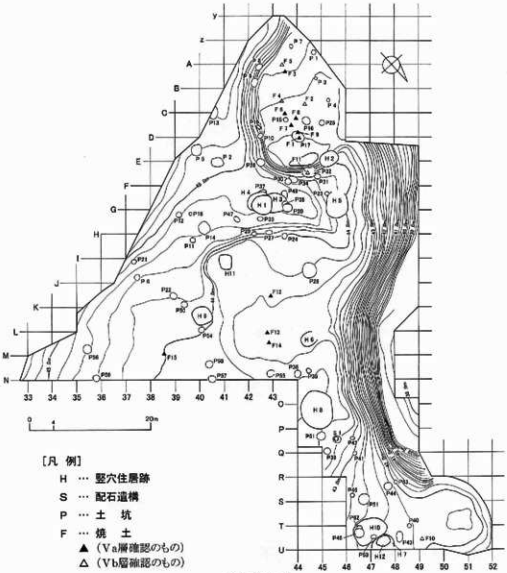
遺跡は、縄文時代中期から後期を主体とする集落跡である。今回確認された遺構は、竪穴住居跡12軒、配石遺構（石組）1基、土坑60基、焼土15ヵ所などがある。

竪穴住居跡は、埋甕をもつもの（H－1・5・9）や掘り込みの浅いもの（H－7・10）、大型で一部ベンチ構造をもつもの（H－8）、壁際に溝が検出されたもの（H－11・12）など様々な形態のものがある。未調査区を残し全体像は定かではないが、竪穴住居跡は高位の平坦面に立地するものが多く。埋甕をもつ住居跡は、ちょうど流路痕跡を巡るような位置関係にある。また、掘り込みの浅い住居跡は、調査区の下流側（北側）に並んで確認されており、分布域がまとまりをもつことも予想される。

土坑もまた、フラスコ状のもの（P－39・44・51・61）や大型礫を伴うもの（P－16・17）、掘り込みの浅いもの（P－2・5・27・55・57ほか）など多様である。掘り込みの浅いものにも、確認面や覆土状況（黒色土含有の多寡）にそれぞれ違いが見られ、出土遺物を含めた今後の分析が必要である。また、配石遺構（石組）は1基検出され、下部に土坑をもっている。

焼土は続縄文時代のもの（Va層確認）が多く、確認時点でも焼骨片が多量に観察されている。上流側の流路痕跡部分に多く分布しており、川原石や遺物も周辺に多く散在する。

出土遺物総数は、概算でコンテナ240箱分である。現地調査優先のため、整理作業については、水洗作業のみが終了の段階である。現場での概観では、円筒土器下層式や後北式土器も認められている。



遺構位置図

完掘状況（対岸が左岸遺跡）

調査状況

Ko－d層除去後の状況

調査状況

焼土群（F－1、6～9）の検出

H－1

H－1の埋甕

H－8

P－23

P－33

石倉5遺跡（B－15－36）

事 業 名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団北海道支社

所 在 地：茅部郡森町字石倉町519ほか

調査面積：962m²

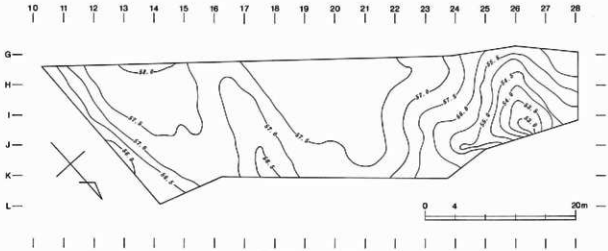
発掘期間：平成15年7月14日～8月7日

調 査 員：熊谷仁志、鎌田　望、田中哲郎、新家水奈、大泰司統

遺跡の概要

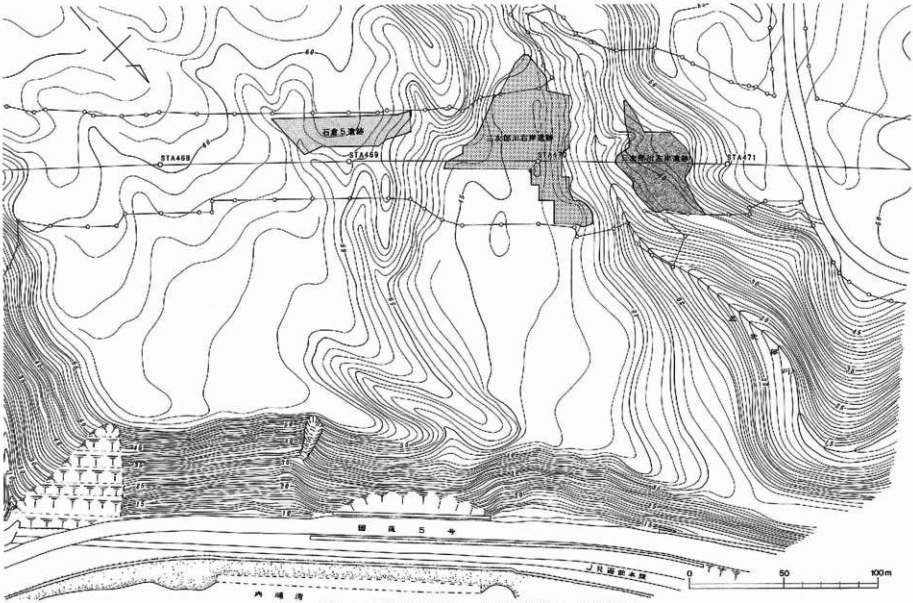
遺跡は森町の北西部、八雲町との町境より2kmほど森町側にある。海岸から250mほど内陸、噴火湾に流れ込む三次郎川の右岸段丘上の標高53～58mに立地する。この下の段丘には三次郎川右岸遺跡、その対岸には三次郎川左岸遺跡がある。

調査範囲には三次郎川に流れ込む3本の沢が横切る。北西側は三次郎川に向かって傾斜する斜面である。基本層序は石倉3遺跡と同じである。試掘調査の結果、今年度の調査範囲には遺物が希薄であったため、重機によりⅥ層まで除去して遺構確認調査を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。次年度以降には今回の調査範囲より海側の部分の調査が行われる予定である。



最終面コンター図

完掘状況



石倉5遺跡・三次郎川右岸遺跡・三次郎川左岸遺跡　調査範囲図

石倉3遺跡（B－15－33）

事 業 名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団北海道支社

所 在 地：茅部郡森町字石倉町483、490

調査面積：3,670m²

発掘期間：平成15年5月6日～7月23日

調 査 員：鎌田　望、新家水奈

遺跡の概要

石倉3遺跡は森町の北西部、八雲町との町境より3kmほど森町側にある。海岸から400mほど内陸、石倉川左岸の海岸段丘上の標高65～72mに立地する。東南方向には駒ケ岳が望める。

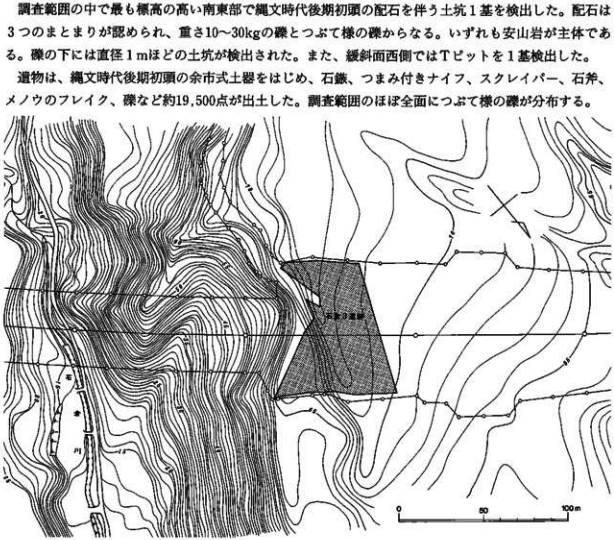
調査範囲は、北西方向に傾斜する緩斜面、石倉川に面する急斜面とその下のテラス部分からなる。

基本層序は表土をⅠ層、その下の駒ヶ岳火山灰d層（Ko－d）をⅡ層、黒褐色土層をⅢ層、Ⅲ層中に挟まる白頭山－苫小牧火山灰層（B－Tm）をⅣ層、黒色土層をⅤ層、漸移層をⅥ層、駒ヶ岳火山灰g層（Ko－g）をⅦ層、濁川カルデラ火山灰層をⅧ層とした。

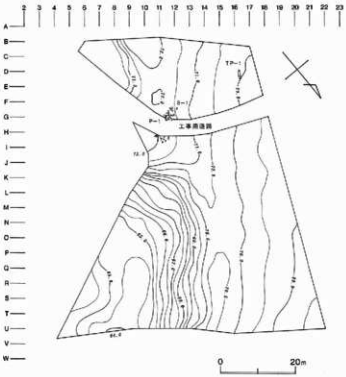
遺構と遺物

調査範囲の中で最も標高の高い南東部で縄文時代後期初頭の配石を伴う土坑1基を検出した。配石は3つのまとまりが認められ、重さ10～30kgの礫とつぶて様の礫からなる。いずれも安山岩が主体である。礫の下には直径1mほどの土坑が検出された。また、緩斜面西側ではTピットを1基検出した。

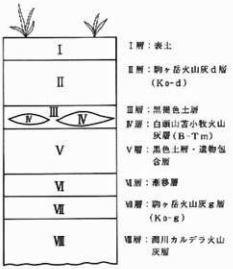
遺物は、縄文時代後期初頭の余市式土器をはじめ、石鏃、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、メノウのフレイク、礫など約19,500点が出土した。調査範囲のほぼ全面につぶて様の礫が分布する。



調査範囲と周辺の地形



遺構配置および地形図



基本土層模式図

配石遺構（S－1）

石倉2遺跡（B－15－32）

事 業 名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財調査
委 託 者：日本道路公団北海道支社
所 在 地：北海道茅部郡森町字石倉町306、308－1ほか
調査面積：2,324m²
発掘期間：平成15年5月6日～8月8日
調 査 員：村田　大、阿部明義、石井淳平

遺跡の概要

遺跡は、森町市街地から北西へ約10km、山地から海岸に迫る2つの細い尾根状の高位段丘上にある。北側の尾根をA地区、南側の尾根をB地区と呼称した。標高は約70mで、周囲は急崖となっており、北側の石倉川や南側の沢との比高が大きい。石倉川をはさんで対岸の高位段丘上に石倉3遺跡がある。遺物包含層の黒色腐食土は薄く、特に尾根の先端部付近ではほとんど残っていない。

遺跡の主な時期は縄文時代中期後半で、A地区では晩期の遺構も一部存在する。

遺構と遺物

A地区からは土坑・Tピット・焼土・土器集中・フレイク集中が検出された。土坑はフラスコ状ピットや土坑墓とみられるものがある。フラスコ状ピットは最も深いもので深さ1.9mを測り（IP－2）、坑底中央部に小ピットがある。覆土上部から石材や色調の異なるフレイクチップが出土したIP－1や、覆土が埋土とみられるIP－3は土坑墓の可能性がある。またIP－8の坑口部からは、ほぼ完形の2個体の土器が出土した。Tピットは石倉川寄りの縁辺部から検出された。土器集中は縄文中期後半のもの1ヵ所、晩期後葉のもの3ヵ所がある。遺物は約7,000点出土した。大半が集中箇所からの出土であり、特に土器集中1からは縄文晩期の土器が約3,500点出土した。

B地区からは、竪穴住居跡・土坑・礫集中が検出された。竪穴住居跡は、尾根先端から山側にかけて11軒が連なって検出された。重複は1ヵ所確認されたが、大きな時期差はないとみられる。竪穴住居跡の形態は楕円形あるいは隅丸方形で、長軸4～6mほどの規模である。柱穴は3～8本検出されたが、確認できないものもあり、配置はやや不規則である。竪穴住居跡の中央部付近の床面に、口縁部と底部が欠損した埋設土器があるものが多い。覆土中には個体をなす土器が含まれるものが多い。また、覆土に炭化物や焼土粒を含むものが多く、大半が焼失した住居と考えられる。特にIH－6からは、上部構造物のものと思われる棒状の炭化材が数多く出土した。遺物は約9,600点出土しているが、大部分は竪穴住居跡からの出土である。土器はその多くが縄文中期後半の榎林式に属する。土製品は土器片再生円盤が多数出土している。石器はスクレイパー・石鏃・扁平打製石器が多く出土している。また竪穴住居跡IH－3の壁際の焼土付近から、長さ約50cmを測る円柱状の石棒が破砕された状態で出土したことが特記される。

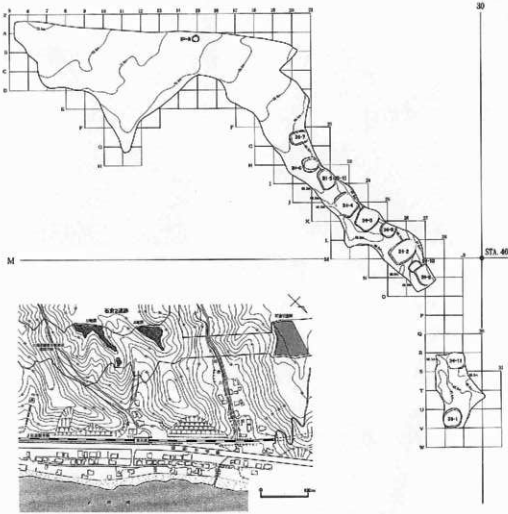
遺構数一覧

記号	遺構種別	遺構数		
		A地区	B地区	計
IH	竪穴住居跡		11	11
IP	土壙 （大型フラスコ状ピット含む）	8	1	9
TP	Tピット〔TP〕	10		10
IF	焼土（屋外）	2		2
(CP)	土器集中	4		4
FC	フレイク集中	2		2
IS	礫集中		1	1

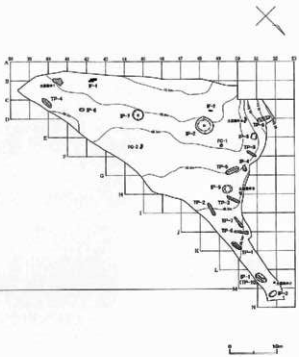
遺物集計（仮）

	地区	A地区	B地区	合計
土器等	縄文中期	921	6,179	7,100
	縄文晩期	5,205	0	5,205
	土製品	0	41	41
	計	6,126	6,120	12,246
石器等	石器	26	147	173
	フレイク等	681	968	1,649
	石製品	1	133	134
	礫	81	2,275	2,356
	計	789	3,523	4,312
合計		6,915	9,683	16,598

石倉２遺跡周辺の地形



石倉２遺跡　遺構位置図



基本土層模式図

IP－2土層断面（南西から）

TP－6完掘（南東から）

IP－8墳口部土器出土状況（南東から）

土器集中Ⅰ（縄文時代晩期）（北東から）

B地区遺景（北西から）

IH－6炭化材出土状況（北西から）

IH－6埋設土器断面（北西から）

IH－3焼土・炭化物検出状況（南から）

IH－3石棒片出土状況（北西から）

石倉（いしくら）1遺跡（B－15－29）

事 業 名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団北海道支社

所 在 地：茅部郡森町字石倉町396,404ほか

調査面積：1,900m²

発掘期間：平成15年5月6日～8月27日

調 査 員：熊谷仁志、田中哲郎、大泰司統

遺跡の概要

石倉1遺跡は、森町市街地から北西側に約9km、海岸から約700m内陸の濁川河岸段丘上に立地し、調査地点の標高は約38～43mである。約200m南東、濁川側には、無名沢を挟んで濁川左岸遺跡が所在する。今年度は、平成14年度調査地点の南北両側を引き続き調査した。便宜的に南側をAおよびA'地区、南側をB地区と呼称する。ただし、工事工程との調整から、本遺跡の調査は一時中断することなり、来年度以降に持ち越しとなった。

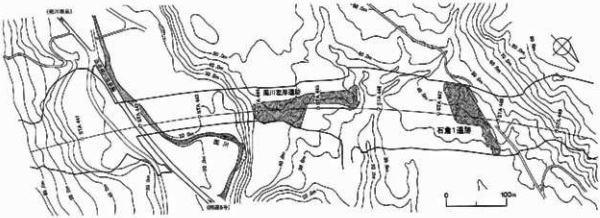
基本土層は1層：黒褐色土、表土・耕作土、II層：駒ヶ岳火山灰d層（Ko－d）、III層：黒褐色土層、IV層：黒色土層、III層とIV層の間で部分的に白頭山－苫小牧火山灰（B－Tm）が見られる。V層：黄褐色土、駒ヶ岳火山灰g層（Ko－g）に由来する橙褐色砂質土を含む。色調は漸移的で、一部明瞭な腐食土の発達が確認された。VI層：黄褐色ローム層。遺物包含層は基本的にIV層およびV層である。

A（A'を含む）地区では、土坑2基を検出している。うち1基（ＩＰ－4）は坑口部に大型礫をもつもので、昨年度検出のＩＰ－1に似る。遺物出土頻度はHラインより南側に多く、今回の調査範囲の南側きわに竪穴住居跡のくぼみが一部検出されるなど、遺跡はより南西側に広がることが想定される。

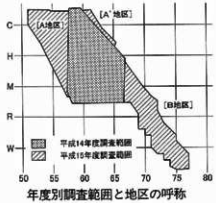
B地区は尾根状に残る段丘面の斜面地で、遺構の検出はないものの、多くの遺物が出土している。斜面低地では、IV層と沢地に明瞭に堆積するKo－g間に、何枚かの腐食土層を挟みながら1mほどの青灰色砂礫層の堆積が確認された。山側からの滲し水は調査期間中枯れることがなく流れ、湿潤な状態であったが、木製品等植物質の遺物の出土はない。

遺物は、昨年同様、縄文時代中期から後期初頭のものが主体で、A・B両地区あわせ約27,400点余りが出土している。また、縄文時代早期の土器片（貝殻文）がA地区（V層）から僅かながら出土した。

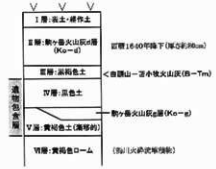
B地区　Ko－d層除去後の状況



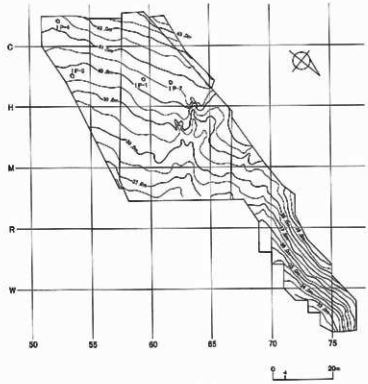
遺跡の位置と周辺の地形



年度別調査範囲と地区の呼称



基本土層模式図



遺構位置図

IP－4

B地区　遺物出土状況

本茅部１遺跡（Ｂ－15－23）

事 業 名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団北海道支社

所 在 地：茅部郡森町字本茅部町274ほか

調査面積：498m²

発掘期間：平成15年５月６日～６月６日

調 査 員：遠藤香澄、芝田直人、山中文雄

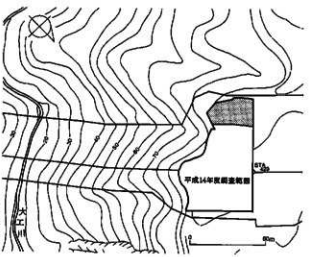
遺跡の概要

遺跡は森町市街地から８kmほど八雲町寄り、噴火湾に面する標高85mほどの火砕流台地上にある。平成14年度に、北東側に連続する範囲2,200m²について調査を終了している。今年度調査区の南西側は急傾斜地で崩落しており、包含層は大きく失われていた。この崖下を流路長３kmに満たない大工川が流れている。また、南側も林道により削平されていた。

基本土層はⅠ層：表土、Ⅱ層：駒ヶ岳火山灰ｄ層（Ko－d）、Ⅲ層：灰褐色土、Ⅳ層：黒色土、Ⅴ層：漸移層、Ⅵ層：駒ヶ岳火山灰ｇ層（Ko－g）で、遺物包含層はⅣ層である。

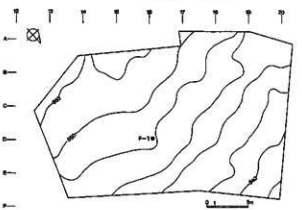
遺構と遺物

縄文時代の焼土跡が１ヵ所検出されている。遺物は土器340点、礫を含む石器等117点合わせて457点で、その多くはⅣ層中位～下位から出土した。土器は全体の３分の１ほどが残存する縄文中期前半サイベ沢Ⅶ式期の１個体分の破片と晩期中葉～後葉に属する鉢形、深鉢形土器とみられる２個体分に相応する破片があり、時期により土器片の分布域が異なっている。石器には頁岩製のナイフ、泥岩製の石斧とその破片、たたき石、細い溝のある軽石製の砥石がある。



今年度調査範囲（網かけ部分）

遺跡の位置



最終面地形と遺構位置図

包含層調査状況（北西から）

焼土検出状況

縄文晩期の土器出土状況

上台（うわだい）2遺跡（B－15－31）

事 業 名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団北海道支社

所 在 地：茅部郡森町字上台町326－1、326－5

調査面積：5,026m²

発掘期間：平成15年5月6日～10月28日

調 査 員：袖岡淳子、坂本尚史

遺跡の概要

上台2遺跡は、森町市街地から南側に約2km、南西側の山地から続く台地上に立地している。現在の海岸線からは直線で約2.5km、駒ケ岳山頂からは直線で約10.3kmの距離がある。遺跡の地形は西から東への緩斜面で、標高は87～102mである。遺跡の南東側には森川の支流が流れ、調査区との比高は約8mである。森川支流の対岸には上台1遺跡が、さらに南東側には森川4遺跡、森川3遺跡が位置する。昨年度、畑跡が検出された森川3遺跡とは約500mの距離がある。

基本層序はⅠ～Ⅸ層に分層した。Ⅰ層：表土、Ⅱ層：駒ケ岳火山灰d層（Ko－d、1640年降灰）、Ⅲ層：黒褐色土、Ⅳ層：白頭山－苫小牧火山灰（B－Tm、10世紀後半降灰）、Ⅴa層：黒色土、Ⅴb層：火山灰が散在する黒褐色土、Ⅴc層：暗褐色土、Ⅵ層：駒ケ岳火山灰g層（Ko－g、約6000年前降灰）、Ⅶ層：灰褐色土、Ⅷ層：暗灰黄褐色土、Ⅸ層：濁川火砕流である。遺物包含層は、Ⅴa～Ⅴc層とⅦ層で、前者で縄文時代前期後半から同晩期、後者で縄文時代早期に属する遺物が出土している。

遺構と遺物

遺構は、中世から近世の間に構築されたとみられる畑跡、続縄文時代から近世の間とみられる焼土66ヵ所、縄文時代の土坑2基、Tピット4基が確認された。

畑跡は、明瞭な畝立ての痕跡がなく、地形の傾斜方向に沿って直線状（溝状）に耕したものとみられる。そして、その溝状耕作部分（以下耕作溝）に作付けがおこなわれた可能性がある。畑跡の構築時期は、Ⅲ層中からⅣ層（B－Tm）を掘り込む状況より、10世紀後半から西暦1640年の間と考えられる。

畑跡の基本的な構造は、耕作溝の幅：15～30cm、耕作溝の間隔：15～150cm、耕作溝の深さ：10～20cm、耕作溝の長さ：5～35m、耕作溝横断面形：緩やかなU字もしくは緩やかなV字、などがあげられる。畑跡は調査範囲のほぼ全面に確認され、さらに調査区外へも広がりをみせるため、畑の面積は6,000m²以上に及ぶことが考えられる。

また、Ⅴa層上面で耕作溝の平面観察をおこない、幅20cmほどの鍬などによるとみられる耕作痕を、部分的ではあるが観察することができた。

Tピットは平面が小判形と長楕円形のものがみられる。

遺物は、コンテナ30箱分が出土した。包含層の遺物は、ごく小規模なまとまりが数箇所認められる他は、散発的な出土状況である。土器は縄文時代早期の条痕文土器、前期後葉の円筒土器下層d式、中期前葉のサイベ沢Ⅶ式、後期前葉の大津式、晩期に属するものがみられる。調査区O53では、晩期の壺形土器が完形で出土した。石器は石鏃、つまみ付きナイフ、石斧、扁平打製石器、敲石、すり石、石皿などがある。出土状況は剥片素材の製品に比べ、剥片の出土量は極めて少ない特徴がある。また、調査区D37では、石斧4点が折り重なるようにまとまって出土した。

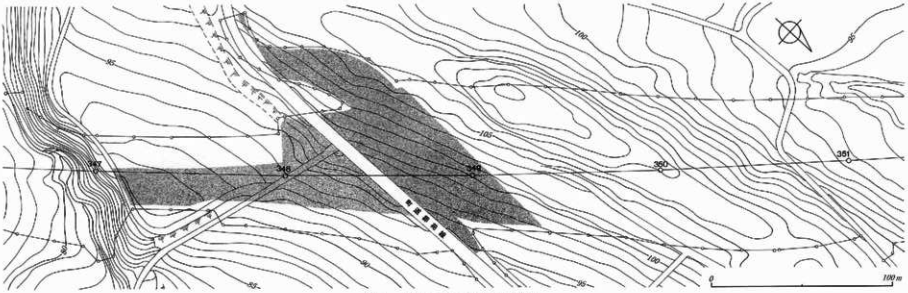


図1　遺跡の位置と周辺の地形

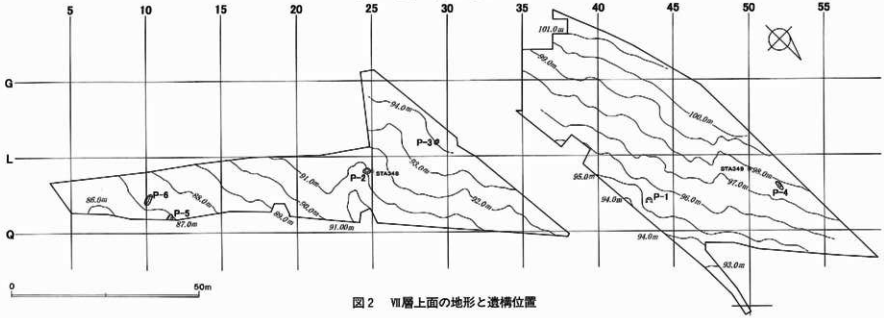


図2　Ⅶ層上面の地形と遺構位置

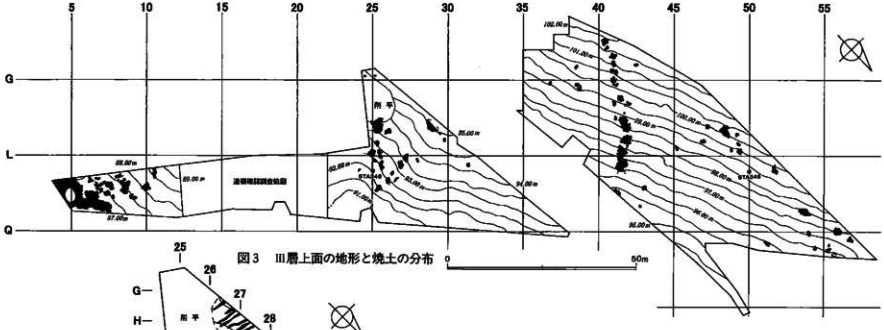


図3　Ⅲ層上面の地形と焼土の分布

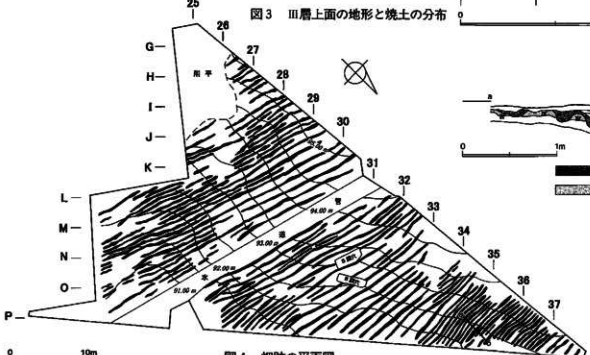


図4　畑跡の平面図

図5　畑跡の断面図

図6　基本土層柱状図

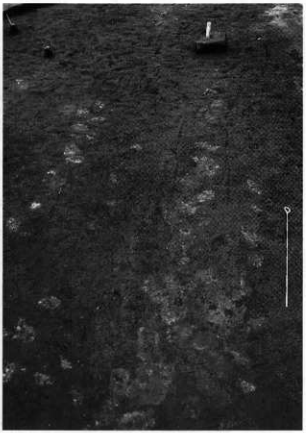
Ⅳ層は砂利による攪乱を受けており、B-Tmのプライマリーな堆積は調査区内では確認できない

遺跡遠景（東から）

調査状況（東から）

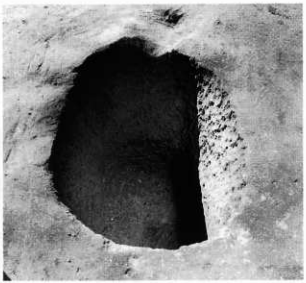
畑跡確認状況（東から）

畑跡確認状況（東から）



鍬によるとみられる耕作痕（東から）

P－6セクション（西から）



P－3完掘（東から）

完掘（北から）

上台（うわだい）1遺跡（B－15－27）

事 業 名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：日本道路公団北海道支社
所 在 地：北海道茅部郡森町字上台33－1、42－1、364ほか
調査面積：6,200m²
発掘期間：平成15年5月6日～10月24日
調 査 員：種市幸生、谷島由貴、影浦　覚、柳瀬由佳

遺跡の概要

遺跡は、森町中心部から南へ約2km、森川の支流2本に東西を挟まれた段丘上に位置する。南西側の山地から続く台地の先端部分に位置し、遺跡の標高は78～90mである。基本土層は地表面から、Ⅰ層：表土、Ⅱ層：駒ケ岳火山灰d層（Ko－d）、Ⅲ層：黒褐色土、Ⅳ層：白頭山－苫小牧火山灰層（B－Tm）、Ⅴ層：黒色土、Ⅵ層：褐色土（漸移層）、Ⅶ層：駒ケ岳火山灰g層（Ko－g）、Ⅷ層：褐色粘質土、Ⅸ層：灰オリーブ色土、Ⅹ層：濁川火砕流となっている。支流に面する緩斜面上にはⅤ層上部に土石流跡と考えられる自然攪乱層が平均50cm堆積していた。主な遺物包含層は、その土石流下のⅤ層である。

遺構・遺物は主に両側の支流に向かった緩斜面および低位段丘部分において集中する。調査区中央に位置する台地の平坦部分についてはTピットやフラスコ状土坑を数基検出したものの、ほとんど遺物を検出していない。出土土器の時期は縄文時代前期後葉、中期中葉、後期前葉から中葉、晩期後葉に属するものが見られたが、検出遺構の構築時期は覆土内の遺物出土状況から大半が縄文時代後期前葉後半に属すると考えられる。

遺構と遺物

遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑（土壙を含む）59基、Tピット5基、立石7基、配石遺構3ヵ所、集石3ヵ所、石囲い炉14基、フレイク集中4ヵ所、焼土4ヵ所、柱穴状ピット61ヵ所である。

竪穴住居跡は内部に周溝を持つ。柱穴状ピットと立石7基はすべてこの住居跡の周辺で検出された。立石はいずれも掘り込みを伴い、埋設が確認されたものである。土坑は覆土内に多量の礫を含んでいるものが多く見られた。また、調査区東側の支流に面した地区において小フラスコ状の土坑が11基検出された。これらはいずれも径が1m前後で、ややいびつなオーバーハングを特徴とするものである。配石遺構は礫を複数安置したものとして3基を数えるが、他にも、石囲い炉としたもので一部礫を立てるなど配石様にしているものや、土坑の坑口部や覆土内に礫を伴っているものも少なからずある。西側の支流に面した低位段丘部では、径2m、深さ1.5mほどの大型土坑が2基検出されたが、これらは礫層まで掘り込んだ坑底付近を、ほぼ純粋なKo－g火山灰で埋め戻し、その上に多量の礫を入れたというものであった。うち1基では最大重量が約100kgという巨礫も含まれていた。集石としたものは小円礫が密に検出されたものである。掘り込み等は確認されなかったが、楕円形を呈していたことから、土坑の坑底部に小円礫を敷き詰めたものの可能性も考えられる。

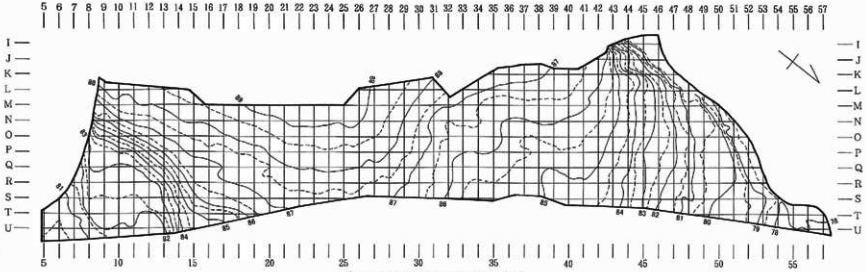
遺物は現在集計中であるが36－2Bコンテナ換算で約230箱が出土した。うち9割が土器である。土器の中では縄文時代後期前葉のものが8割を占め、その中でもトリサキ式・大津式相当のものが比較的多く見られた。次いで縄文時代中期の円筒土器上層式～サイベ沢Ⅶ式相当が出土しており、他に前期後葉の円筒土器下層式相当、後期中葉の手稲式相当、晩期後葉の聖山Ⅱ式相当等の資料が若干数出土した。石器では石鏃、スクレイパー、たたき石、扁平打製石器、北海道式石冠、石皿・台石等が多い傾向が窺われる。

森川2遺跡 ⇐

⇒ 上台2遺跡

0 10 20m

遺構位置図



グリッド配置図および最終面地形

土坑UP－12

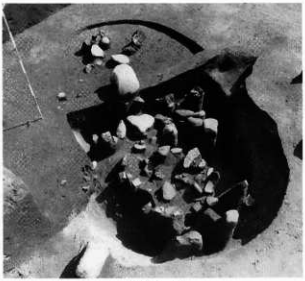
土坑UP－14（左）・UP－25（右）

竪穴住居跡UH－4

土坑UP－8

土坑UP－11

土坑UP－21



土坑UP－59

森川4遺跡（B－15－30）

事 業 名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財調査
委 託 者：日本道路公団北海道支社
所 在 地：北海道茅部郡森町字森川町317－18ほか
調査面積：1,400m²
発掘期間：平成15年5月6日～10月24日
調 査 員：村田　大、阿部明義

遺跡の概要

遺跡は、海岸から2kmほど内陸に入った森川の右岸河畔に位置する。調査区内は標高88m前後の下位の段丘と標高95mほどの上位の段丘の縁辺部、その間の段丘崖を含んでいる。上位の段丘に森川3遺跡が隣接し、森川の対岸には森川2遺跡、上台1遺跡、上台2遺跡が続いている。

調査区内東側は段丘崖が大きく内湾しており、森川の流水により大きく開析されたことがうかがえる。かつての攻撃面付近の調査区北東側の黒色土（Ⅲ～Ⅴ層）は厚く、最大で1.5mに達する。黒色土層中には段丘崖からの崩落土とみられるやや厚い堆積物層がある。また河床にあたる低位の段丘には多量の円礫が帯状に堆積し、一時期河原をなしていたとみられる。この石原付近から焼土が検出され遺物が多数出土するなど、活動の痕跡が顕著にみられる。

遺構と遺物

遺構は土坑、石組炉、焼土を検出した。土坑は段丘崖から3基、上位の段丘縁辺から5基検出された。土坑のうち、MP－2は覆土の上位に焼土があり、その上に1,000点以上の小礫が円形に敷かれていた。土坑の周囲に柱穴状小ピットが巡っていた。何らかの儀礼的行為が行われた土壙墓の可能性がある。またMP－7は大型のフラスコ状ピットで、深さ1.8mを測る。覆土中位から縄文中期後半の土器が1個体出土した。石組炉は段丘崖下の黒色土中から2ヵ所が近接して検出された。当時の生活面は明瞭には確認できなかったが、周囲から焼土や柱穴状小ピットが検出されている。石組炉MS－1の中には、縄文後期のトリサキ式土器が1個体残されていた。また石組炉の周囲から焼土粒と炭化材が検出された。

遺構数一覧

記号	遺構種別	遺構数
MP	土壙（大型フラスコ状ピット含む）	8
SP	柱穴状小ピット（単独）	2
MS	石器集中（石組炉）	2
MF	焼土	5

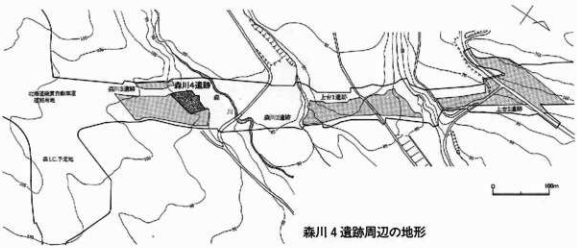
遺物は24,000点余りが出土している。遺構に伴うものは少なく、90%以上が包含層からの出土である。段丘崖下の攻撃面付近において遺物点数が多く、特に崩落土やその下層のⅤd層の遺物密度が高い。

土器は縄文時代前期～晩期のものが出土しており、縄文前期では円筒下層式およびその直前、中期では円筒上層式、後期ではトリサキ式、手稲式、晩期では聖山Ⅱ式（大洞A式）が多い。土製品は土器片再生円盤、三角形土製品がある。石器は完形で出土するものが多く見られた。剥片石器はスクレイパー、つまみ付きナイフ、石鏃が多い。

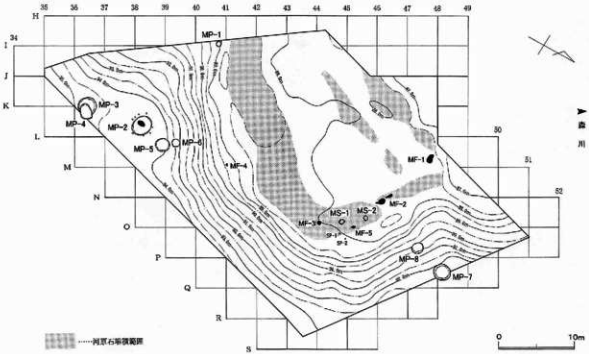
礫石器はすり石の多さが特に目に付き、扁平打製石器、北海道式石冠、石皿なども多く出土している。また、MF－2から「石冠様石器」も出土している。

遺物集計（仮）

		遺構	包含層	合計
土器等	縄文前期	39	3,542	3,581
	縄文中期	215	8,197	8,412
	縄文後期	197	8,570	8,767
	縄文晩期	0	542	542
	土製品	1	20	21
	計	452	20,871	21,323
石器等	石器	7	457	464
	フレイク等	16	1,032	1,048
	石製品	14	2	16
	礫	1,186	27	1,213
	計	1,223	1,518	2,741
合計		1,675	22,389	24,064

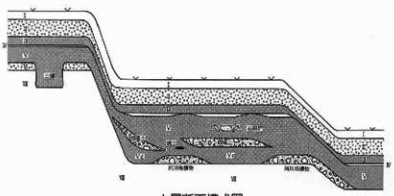


森川４遺跡周辺の地形

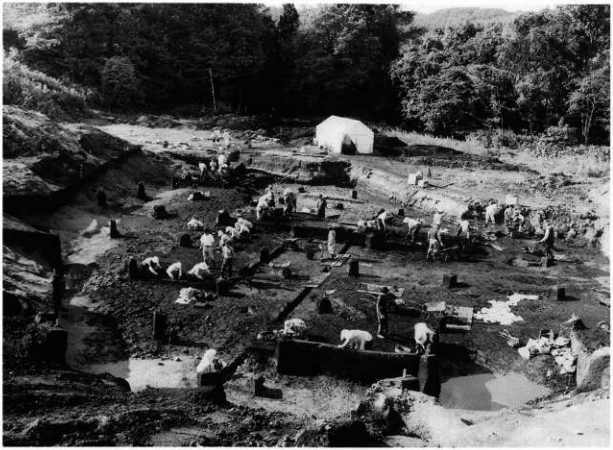


森川４遺跡　遺構位置図［地形は黄褐色ローム層上面］

基本土層模式図



土層断面模式図



低地部調査状況（北東から）

MP－7完掘（南東から）

MS－1検出（南から）

低地部遺物出土状況（西から）

森川（もりかわ）3遺跡（B－15－26）

事　業　名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財調査
委　託　者：日本道路公団北海道支社
所　在　地：山越郡森町字森川町317－18ほか
調査面積：600m²
発掘期間：平成15年5月6日～平成15年10月31日
調　査　員：穐市幸生、谷島由貴

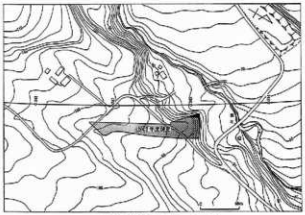
遺跡の概要

遺跡は海岸線から2.5km内陸の森町市街地南側の標高90～100mに位置し、内浦湾に流れ込む流長約10kmの森川の河岸段丘上に立地する。森川3遺跡の南西側は段丘下から森川に挟まれた低地に森川4遺跡が立地し、森川とその支流に挟まれた低平な河川氾濫原に森川2遺跡が立地する。更に森川の支流から南西側に上台1遺跡、上台2遺跡がある。

森川3遺跡は平成14年度に2,200m²の調査を行った。この調査では近世の畑跡がほぼ全面で検出された。縄文時代前期・中期の住居跡・土坑などの遺構・遺物が検出されている。また、続縄文時代の遺物が出土している。遺構・遺物は森川側の段丘崖付近で多い。

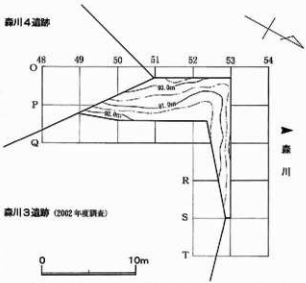
本年度の調査範囲は、河岸段丘崖部分60m²の調査を行った。段丘崖のうち西側は森川4遺跡に繰り入れ、昨年度調査範囲に隣接する南西端を森川3遺跡の調査範囲とした。

遺構・遺物は検出されなかった。発掘調査以外に、畑跡の土壌を分析するため南西側約600m離れた上台2遺跡と共に土壌サンプルを採取し、現在分析中である。また、道教委は、畑跡の拡がりを確認するため森川3遺跡に隣接する南側について範囲確認調査を行い、その結果、畑跡は南側に連続すると確認されている。



森川3遺跡周辺の地形

2003年度調査区全景



森川3遺跡　地形測量図〔黄褐色ローム層上面〕

西島松（にしましまつ）3遺跡（A－04－36）・西島松（にしましまつ）5遺跡（A－04－38）

事 業 名：柏木川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道札幌土木現業所

所 在 地：恵庭市西島松537－6～12、531－12、544－3ほか

調査面積：西島松3遺跡4,120m²、西島松5遺跡980m²

発掘期間：平成15年5月8日～10月31日

整理期間：平成15年4月1日～平成16年3月31日

調 査 員：佐藤和雄、鈴木　信、土肥研晶、佐藤　剛、立田　理

遺跡の概要

西島松3・5遺跡は、恵庭市の西方、JR恵み野駅から北西約800mに位置する。遺跡は、東を柏木川、西を柏木川の支流であるキトウシュメンナイ川に挟まれた標高約25mの沖積低地上に立地する。今年度は遺跡調査の4ヵ年目にあたる。3遺跡と5遺跡の境は調査区東西方向の38ライン付近で地番により便宜的に南北に分かれるが、遺跡の内容は一連のものである。ただし、3遺跡側は過去分譲され、重機による深い削平を受けており、浅い遺構は、ほぼ失われていた。

また、調査区は東西の低湿地に挟まれており、そこからは木製品も検出されている。

基本土層は、Ⅰ層：表土・耕作土、Ⅱ層：黒色土、Ⅲ層：漸移層、Ⅳ層：黄褐色土（支笏軽石流の2次堆積）となっている。調査区内には部分的に樽前a降下軽石層がⅡ層上に残存していた。また遺物包含層であるⅡ層は縄文後期～晩期初頭の盛土遺構を境にⅡA層、ⅡB層に分けた。

遺構と遺物

今年度は、竪穴住居跡50軒、土坑231基（土壙墓を含む）、Tピット2基、焼土117ヵ所、柱穴201基を調査した。また、過年度から続く、縄文時代後期後葉から晩期前葉にかけての盛土遺構の続きも確認した。竪穴住居跡は、縄文時代早期から擦文時代にかけての各時期が検出された。

土坑では、縄文時代後期末～晩期前葉にかけての土壙墓約150基が検出された。これらの墓は調査区の東側と西側に分かれて墓域を形成しているようで、調査を行った37基の結果では、東側に分布する墓のほうが古いと考えられる。副葬品は、土器、石器、漆製品（櫛、腕輪、玉ほか）、玉類（かんらん岩、琥珀など）、サメの歯などが出土した。

残りの土壙墓は次年度調査予定である。

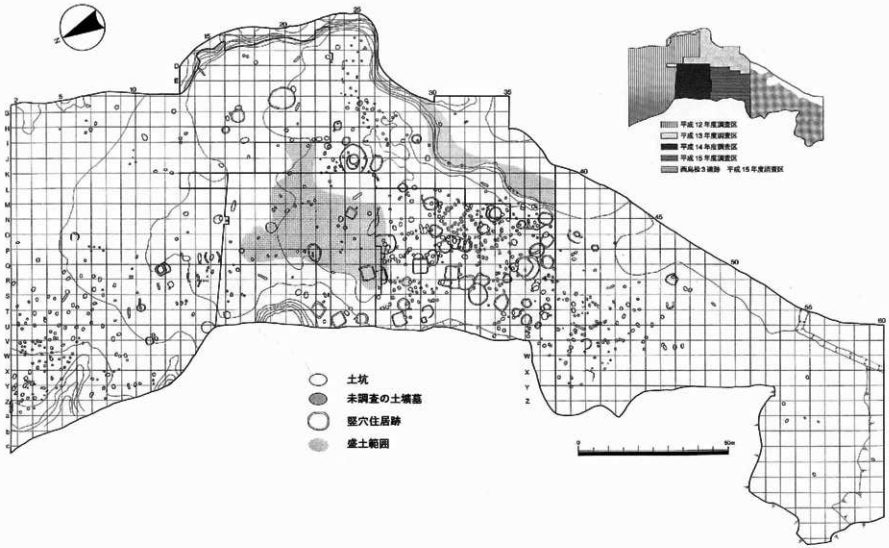
整理の概要

西島松5遺跡の平成13年度調査の報告書作成作業を行った。

平成13年度の調査では、竪穴住居跡9軒、土壙墓59基、土坑51基、Tピット2基、焼土94ヵ所、柱穴1,499基、一括出土遺物5ヵ所、盛土遺構3ヵ所（MA、MB、MC）を検出し、このうち、台地上の遺構（MC盛土を除く）と、12年度の調査で土壙墓から出土した金属製品については報告書を刊行した（西島松5遺跡（2））。また、盛土遺構と低位段丘及び斜面で検出した遺構（土坑4基、焼土8ヵ所）については遺物の接合・復元と実測図・拓影図の作成、図版作成、写真撮影を行った。自然遺物については、選別・同定作業を行っている。

平成13年度の調査で出土した金属製品は、保存処理を進め、観察カード作成、X線写真撮影、クリーニング、実測図作成、脱塩、樹脂含浸を行っている。また、平成12年度の調査で土壙墓から出土した金属製品のうち、㈶元興寺文化財研究所保存科学センターに委託していた残存状態の良好な刀剣類20点について、保存処理が終了した。新たな知見が得られたため、今後、報告する予定である。

なお、報告書は次年度に刊行する予定である。


平成12年度調査区
平成13年度調査区
平成14年度調査区
平成15年度調査区
西島谷3遺跡　平成15年度調査区
土坑
未調査の土墳墓
竪穴住居跡
盛土範囲
0
50m

遺構位置図

土壙墓検出状況（後期末～晩期前葉）

土壙墓調査状況

縄文時代後期中葉の竪穴住居跡

縄文晩期後葉の土壙墓

柏木川13遺跡（A－04－107）

事 業 名：柏木川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：北海道札幌土木現業所
所 在 地：恵庭市北柏木川１丁目256、281
調査面積：1,401m²
発掘期間：平成15年５月６日～７月11日
調 査 員：鈴木　信、吉田裕吏洋、立田　理

遺跡の概要

遺跡はJR千歳線恵み野駅の西方1.5km、柏木川左岸にあり、標高約30mの低位河岸段丘に位置する。柏木川流域は恵庭市内でも遺跡の豊富な地区であり、対岸は柏木川８遺跡、また約200m下流には柏木川11遺跡が隣接している。柏木川13遺跡の調査は1987年と2002年に恵庭市教育委員会によって行われ、今回が３回目の調査にあたる。

遺構と遺物

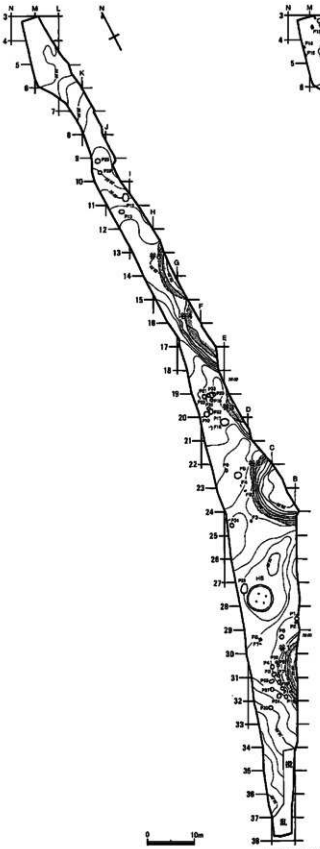
遺構は住居跡が５軒、土坑34基、焼土15ヵ所であり、住居のうち擦文文化期に属するものが４軒、縄文時代早期のものが１軒となっている。擦文文化期の住居は調査区の中央と南部の２対に分かれ、中央部にある２軒（H－3・4）は南東にかまどを持ち、平面形は正方形を呈する。規模は１辺が６mを超える大型の住居である。南部の２軒（H－1・2）は南側にかまどを持ち、平面形は同じ正方形であるが、外側四隅に内傾する柱穴を持ついわゆる「カリンパ型」の住居である。全ての住居に焼失の痕跡が認められ、多数の炭化材が覆土中、床面から出土している。早期の住居（H－5）は調査区のやや南よりに検出され、床面からアルトリ式とみられる貝殻文平底土器、蛇紋岩製の石斧、石のみ、石斧の破片を利用した石製品が出土している。土坑のうち、調査区中央に位置するP－26は縄文時代後北C２・D期の土坑墓とみられ、楕円形を呈する壙底の先端から、完形の鉢が埋め込まれた状態で出土している。また縄文時代晩期に属するとみられる円形の土坑が調査区の中央から南にかけて検出されている。規模は直径0.3～1.2m程度で、谷地形の谷頭付近に群集する傾向がある。

遺物は総計11,971点出土している。そのうち土器が9,278点であり、晩期が最も多く、ついで早期、中期、擦文と続く。石器は2,693点出土し、内訳は各時期のものとみられる石鏃、石槍、スクレイパーなどであり、定形的なものが多い。

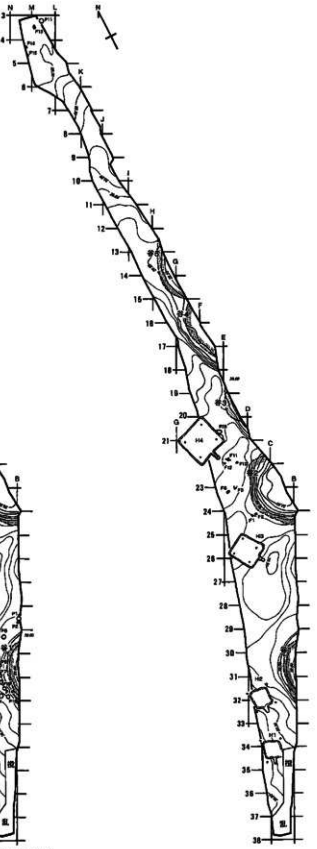
※平成6年度修正、5万分の1図札幌第7号「恵庭」の一部に加筆したものである。

遺跡の位置

縄文時代の遺構



続縄文時代以降の遺構



遺構位置図

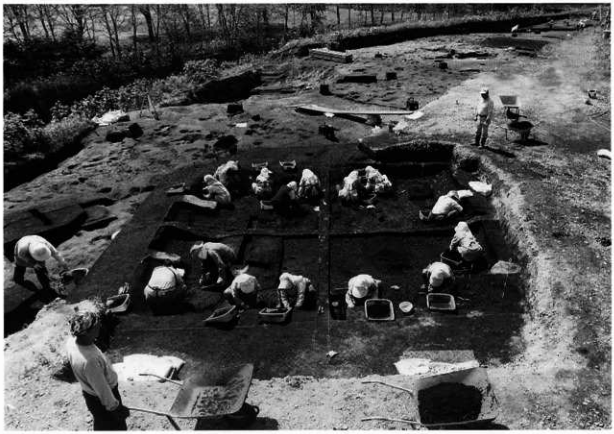
H－5全景（東から）

H－5土層断面（南から）

H－5石斧出土状況（北から）

H－5床面遺物出土状況（東から）

H－2全景（北東から）



H－4調査風景（北から）

3　現地研修会の記録

9月12日（金）に、江別市対雁2遺跡を主会場にして現地研修会を行った。今回は、研修テーマを「低地部の遺跡」とし、当埋蔵文化財センターが調査中の遺跡のみならず、札幌市埋蔵文化財センターが調査中の遺跡2ヵ所も見学した。ここに研修会の主旨と遺跡分布図を再録しておく。

テーマ：「低地部の遺跡」

江別市対雁2遺跡で縄文時代晩期後半の遺構・遺物が重層的に出土しているのは、ご存知のとおりです。今夏で5回目の発掘をおこなっています。

1990年以降、札幌市内では札幌市埋蔵文化財センターにより標高10m未満の低地部での発掘調査が数多く行われ、標高5m程度の場所から縄文時代晩期、続縄文時代、擦文文化期、アイヌ文化期の遺構・遺物の検出が相次いで報じられてきました。さらにこれらの遺跡では、河川営力による自然埋積層を手がかりとして擦文文化期であっても複数の文化層が確認される例が多くなっています。

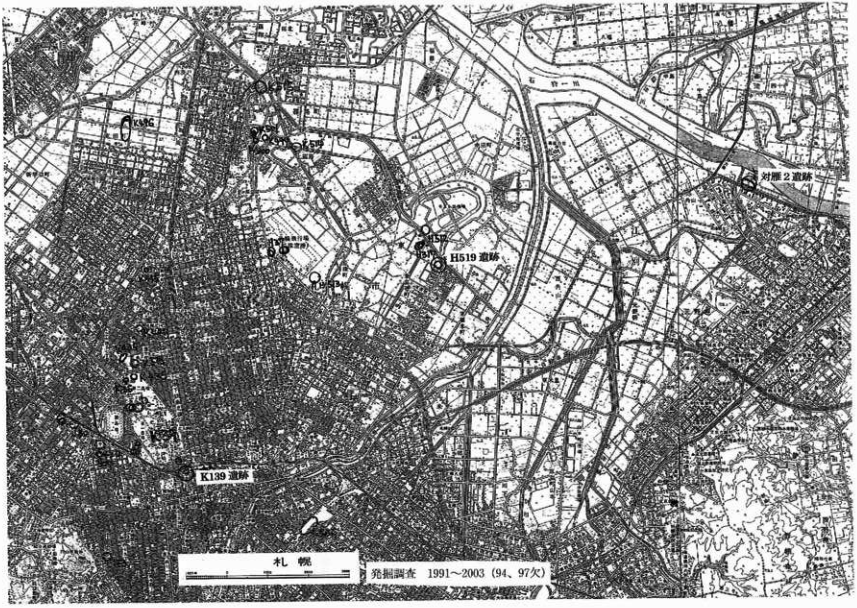
河川堆積物に覆われた遺跡の実際ということで、当埋蔵文化財センターが調査を継続している江別市対雁2遺跡、札幌市埋蔵文化財センターが調査中の東区所在H519遺跡、北区所在K135遺跡などを見学します。

対雁2遺跡での研修

札幌市　H519遺跡での研修

石狩川の最下流部における遺跡の形成という観点での現地研修になります。

調査中の遺跡見学にあたって、説明の労をいとわれなかった札幌市埋蔵文化財センター、上野秀一、石井淳、出穂雅実の諸氏には、記してお礼申し上げます。


対照2遺跡
H519遺跡
K139遺跡
札幌
発掘調査 1991～2003（94、97欠）

4　協力活動及び研修

(1) 協力活動

ア　発掘現場見学

＊対雁２遺跡見学（「みずウォーク2003北海道シリーズ石狩川大会」参加者200名）　5月25日
＊対雁２遺跡見学（石狩川開発建設部研修20名）　6月20日
＊西島松５遺跡見学・体験発掘（札幌市立曙小学校６年生36名）　6月24日
＊穂香竪穴群見学（根室市民38名）　6月29日
＊対雁２遺跡見学・体験発掘（江別市立中央中学校１年生40名）　7月２日
＊対雁２遺跡見学・体験発掘（札幌市立三角山小学校６年生52名）　7月３日
＊穂香竪穴群見学・体験発掘（中標津町立中標津東小学校６年生85名）　7月15日
＊旧白滝５遺跡見学（まるせっぷ子ども文化教室・小学生13名）　7月19日
＊石倉２遺跡見学（七飯町歴史館ジュニア探検クラブ会員30名）　7月28日
＊キウス５遺跡見学・体験発掘（苫小牧市立緑陵中学校３年生８名）　7月29日
＊西島松５遺跡見学（恵庭市民施設見学会参加者40名）　7月29日
＊西島松５遺跡見学（北海道浅井学園大学学生20名）　7月31日
＊対雁２遺跡見学（江別市学芸員補・研修３名）　8月１日
＊穂香竪穴群見学（根室市博物館開設準備室主催「穂香竪穴群見学会」参加者）　8月23日
＊キウス５遺跡見学（NHK新札幌文化センター講座16名）　9月４日
＊上磯町館野遺跡見学（平成15年度南北海道考古学情報交換会参加者30名）　9月20日
＊キウス５遺跡見学（札幌開発建設部歴代部長会17名）　10月１日
＊キウス５遺跡見学（札幌学院大学学生６名）　10月７日
＊対雁２遺跡見学（江別市立上江別小学校６年生180名）　10月21日

イ　委員会・講演会

＊平成15年度恵庭市カリンパ３遺跡整備検討委員会委員（恵庭市）　4月１日～３月31日
　《委員》畑
＊平成15年度イオル再生等アイヌ文化の伝承方策に関する基礎調査委員（札幌市）
　《委員》畑　6月13日、10月23日
＊恵庭市カリンパ３遺跡調整会議（恵庭市）　4月８日
　《委員》畑
＊平成15年度北海道考古学会研究大会「縄文の漆を科学する」　4月26日
　《司会》三浦
＊江別市郷土資料館友の会定期総会歴史講座（江別市）　6月14日
　《講師》西脇「対雁２遺跡の発掘調査について」
＊平成15年度第１回恵庭市カリンパ３遺跡整備検討委員会（恵庭市）　6月25日、10月10日
　《委員》畑
＊最寄貝塚発掘調査（網走市）　7月１日～９月20日
　《委員》畑

＊平成15年度北海道高等学校長協会石狩支部第２回研究協議会開催に係る講演（江別市）　７月８日
《講師》越田（賢）
＊『北海道の文化』編集委員　７月17日
《委員》越田（賢）
＊史跡最寄貝塚保存整備委員会（網走市）　８月30日
《委員》畑
＊北海道開拓記念館2003年移動博物館「北海道のうるし文化」（南茅部町）　９月６日
《講師》田口
＊平成15年度札幌大学　10月１日～３月31日の各土曜日
《講師》越田（賢）「北海道と先史学」
＊環日本海交流史研究集会（金沢市）　10月23日～10月25日
「縄文後晩期の低湿地集落ー生業の視点で考えるー」
《発表者》倉橋
＊史跡標津遺跡群、天然記念物標津湿原整備委員会（標津町）
《委員》畑　10月25日～10月26日、12月１日～12月２日
＊酪農大学教職課程履習講義「総合演習」オホーツク文化の探求Ⅱ（センター研修室）
《講師》西田　10月６日
《講師》種市　12月８日
《講師》鈴木（信）　12月15日
＊苫小牧市博物館博物館大学講座（苫小牧市）　11月15日
《講師》畑
＊平成15年度ノーステック財団　基盤的研究開発育成事業採択課題　11月26日～11月28日
「近世アイヌ社会の形成と日本海交易ー出土遺物の科学分析による定量的考察」
《共同研究員》中田
＊平成15年度北海道文化財・埋蔵文化財担当者会議（札幌市）　11月27日～11月28日
《発表者》越田（賢）
＊東北日本の旧石器を語る会（青森市）　12月６日～12月７日
《発表者》直江
＊南北海道考古学情報交換会（今金町）　12月７日
《発表者》西脇・阿部・中山・大泰司

ウ　調査指導・共同研究
＊新潟県立歴史博物館研究事業総合研究「日本古代『辺境』の様相」研究会（長岡市）
《共同研究員》中田　７月１日～３月31日
＊厚幌１遺跡における火山灰の分析および周辺地形・地質等の調査（厚真町）　７月14日～７月15日
《調査指導》花岡
＊ゆめっく館開館10周年記念事業特別展示会の展示方法等指導（由仁町）　７月17日～７月31日
《調査指導》土肥
＊厚幌１遺跡、ショロマ１遺跡における剝ぎ取り保存および技術指導（厚真町）　８月27日～８月28日
《調査指導》田口

＊野付半島遺跡群調査（別海町）　7～8月の内3日間
《調査指導》花岡・田口
＊野付半島遺跡群調査事業実施に伴う職員の派遣及び出土遺物の分析について
《調査指導》花岡・田口　6月23日～8月30日の内3日間
＊被災遺物の保存処理に関する指導（南茅部町）　7月3日～7月4日
《調査指導》田口
＊科学研究費補助金による研究のためシンポジウムと現地調査（上川町）　8月29日～8月31日
《共同研究員》越田（賢）
＊科学研究費補助金「縄文土器の彩色技法に関する復元的研究」の調査について
《共同研究員》田口　10月29日～11月2日

(2) 研修

ア　研修・研究会参加

＊奈良文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者専門研修（奈良県）
「報告書作成課程」　広田　1月15日～1月24日
「遺跡環境調査課程」　藤原　1月30日～2月14日
「陶磁器調査課程」　鎌田　2月20日～2月26日
「遺跡地図情報課程」　山中　11月11日～11月14日
＊日本文化財科学会20回大会・2003年度総会（島根県）　5月17日～5月19日
田口

イ　内部研修

＊現地研修会（江別・札幌）　9月12日
＊平成15年度現地調査報告会（センター研修室）　11月26日

5　平成15年度資料の貸し出し

提供先	目的	資料名・内容	期間
株式会社ジャパン通信情報センター	『文化財発掘』2003年増刊号への掲載	フィルム－白滝村白滝遺跡群発掘調査・出土遺物写真13点	平成15年4月2日から同6月30日まで
鶴居村教育委員会	発掘調査作業員の研修、発掘調査関係者・地域住民の理解深化に利用	ビデオテープ－「ビビちゃんとフクロウ博士の発掘体験」等2本	平成15年4月18日から同6月30日まで
文化庁文化財部美術学芸課	平成16年度海外展「曙光の時代－日本原始・古代展覧会－」図録への掲載ほか	フィルム－白滝村上白滝8遺跡石器出土状況写真複写板1点	平成15年6月2日から同7月5日まで
江別市郷土資料館	「こども学芸員カレッジ講座」での利用	ビデオテープ－「ビビちゃんとフクロウ博士の発掘体験」等2本	平成15年7月8日から同15日まで
江別市郷土資料館	博物館学芸員資格取得実習生の実習講座での利用	ビデオテープ－「ビビちゃんとフクロウ博士の発掘体験」等2本	平成15年7月30日から同8月2日まで
旭川市博物館	講座開催	ビデオテープ－「ビビちゃんとフクロウ博士の遺跡ってなーに」等4本	平成15年8月8日から同8月19日まで
江別市郷土資料館	「アマチュア考古学講座」での利用	ビデオテープ－「ビビちゃんとフクロウ博士の発掘体験」等2本	平成15年8月27日から同9月30日まで

平成15年11月18日現在

6　平成15年度刊行予定報告書

第194集　『恵庭市　西島松５遺跡(2)』
柏木川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第195集　『白滝遺跡群Ⅳ』
一般国道450号白滝丸瀬布道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第196集　『森町　倉知川右岸遺跡』
北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書

第197集　『森町　石倉２遺跡』
北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書

第198集　『根室市　穂香竪穴群(3)』
一般国道44号根室市根室道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第199集　『森町　本茅部１遺跡(2)』
北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書

第200集　『白老町　ポンアヨロ４遺跡』
一般国道36号登別市登別拡幅工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第201集　『鹿部町　大岩５遺跡』
一般国道278号鹿部道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第202集　『鵡川町　米原４遺跡(3)・宮戸４遺跡(3)』
日高自動車道厚真門別道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第203集　『恵庭市　柏木川13遺跡』
柏木川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第204集　『江別市　対雁２遺跡(5)』
石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第205集　『森町　石倉３遺跡・石倉５遺跡』
北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書

第206集　『千歳市　オルイカ１遺跡(2)』
一般国道337号新千歳空港関連工事内埋蔵文化財発掘調査報告書

第207集　『千歳市　チプニー２遺跡(2)』
一般国道337号新千歳空港関連工事内埋蔵文化財発掘調査報告書

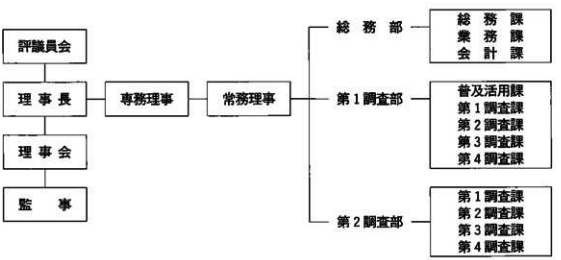
7　組織・機構

役　　員（平成15年６月１日現在）

理事長	森重楯一	常勤	
専務理事	宮崎　勝	常勤	
常務理事	畑　宏明	常勤	
理　事	石林　清	非常勤	北海道地域文化保存振興協会理事長
理　事	菊池俊彦	非常勤	北海道大学教授
理　事	北川芳男	非常勤	日本地質学会名誉会員
理　事	谷本一之	非常勤	北海道立北方民族博物館長
理　事	田端　宏	非常勤	道都大学教授
理　事	西田　豊	非常勤	北海道札幌南高等学校長
理　事	蜂谷光雄	非常勤	由仁町教育委員会教育長
監　事	佐藤一夫	非常勤	苫小牧市勇武津資料館長
監　事	村山邦彦	非常勤	北広島市教育委員会委員長

評 議 員（平成15年６月１日現在）

評議員	加藤邦雄	非常勤	時計台館長
評議員	木田　勇	非常勤	北海道環境生活部生活文化・青少年室生活振興課長
評議員	小竹一史	非常勤	札幌市立信濃中学校長
評議員	昌子守彦	非常勤	酪農学園大学教授
評議員	高澤正良	非常勤	北海道立文書館館長
評議員	鶴丸俊明	非常勤	札幌学院大学助教授
評議員	永井秀夫	非常勤	北海道大学名誉教授
評議員	西村　守	非常勤	北海道教育庁企画総務部教育政策課長
評議員	山田和弘	非常勤	釧路市教育委員会教育長
評議員	山田　健	非常勤	財団法人北海道開拓の村学芸課長



8 職　　員（平成15年7月1日現在）

総務部

総務部長	○下村一久
総務課長	○阪口博治
主査	葛西宏昭
主任	小笠原学
主任	中村貴志
参与	金谷英男
業務課長	菅野聡
主査	礒田千秋
主任	小杉充
参与	市原祺清
会計課長	吉田貴和子
主任	今本宏信
参与	大坪貞昭

第1調査部

第1調査部長	○畑宏明
普及活用課長	○越田賢一郎
主査	藤本昌子
主任	○西脇対名夫
主任	藤井浩
主任	倉橋直孝
第1調査課長	立川トマス
主査	花岡正光
主査	田口尚
第2調査課長	○穐市幸生
主査	谷島由貴
主任	村田大
主任	影浦覚
主任	阿部明義
主任	柳瀬由佳
第3調査課長	○高橋和樹
主査	越田雅司
主任	鈴木宏行
主任	愛場和人
主任	直江康雄
第4調査課長	遠藤香澄
主任	笠原興
主任	芝田直人
主任	福井淳一
文化財保護主事	山中文雄

第2調査部

第2調査部長	西田茂
第1調査課長	佐藤和雄
主査	鈴木信
主任	土肥研晶
主任	佐藤剛
主任	吉田裕吏洋
主任	立田理
文化財保護主事	酒井秀治
第2調査課長	佐川俊一
主任	○中田裕香
主任	中山昭大
主任	冨永勝也
第3調査課長	熊谷仁志
主査	鎌田望
主任	○田中哲郎
主任	袖岡淳子
主任	新家水奈
主任	坂本尚史
主任	大泰司統
第4調査課長	三浦正人
主査	皆川洋一
主任	菊池慈人
主任	末光正卓
主任	広田良成

○：北海道教育庁の派遣職員

調 査 年 報 16

平成15年度

平成16年1月23日発行

編集・発行　財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685-1
TEL 011-386-3231・FAX 011-386-3238
URL http://www.domaibun.or.jp/
E-mail mail@domaibun.or.jp

印　　刷　興国印刷株式会社
〒060-0041 札幌市中央区大通東3
TEL 011-252-2221・FAX 011-252-2229